

鞠智城跡

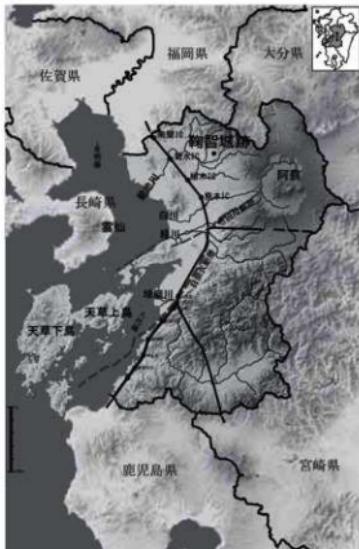
— 第33・34次調査報告 —

2020

熊本県立装飾古墳館分館
歴史公園鞠智城・温故創生館

鞠智城跡

— 第33・34次調査報告 —



2020

熊本県立装飾古墳館分館
歴史公園鞠智城・温故創生館

序文

鞠智城跡は、東アジア情勢が緊迫する7世紀後半に大和政権によって西日本各地に築かれた古代山城の一つであり、『続日本紀』文武天皇2年の繕治記事など、六国史に記載された全国的にも数少ない貴重な朝鮮式山城として、江戸時代から多くの研究者がその痕跡を探し求めるとともに、地元では「米原長者の伝説」として語り継がれ、大切に守り伝えられてきました。

熊本県教育委員会では、昭和42年度から発掘調査を開始し、今年度までに34次に亘る調査を実施し、八角形建物跡をはじめとする72棟の建物跡や3ヶ所の城門跡、貯水池跡、土壘などの重要な遺構が確認され、また、土器や瓦のほか百濟系菩薩立像や木簡などの貴重な遺物が出土するなど古代史上で果たした役割が明らかになってきました。

今回報告する33、34次調査は、平成28年3月に策定した『第3次鞠智城跡保存整備基本計画』に基づき、堀切門跡の構造解明を目的に発掘調査を実施しました。今後は、その成果を基に当該門跡の整備の在り方について検討していくこととしています。

本報告書が、学術的資料としてのみならず、県民の皆様の埋蔵文化財及び史跡の保護に対する認識と理解を深めていただくための一助となれば幸いです。

最後に、調査の実施にあたりご理解とご協力をいただきました関係機関、調査に対するご指導、ご助言を賜りました諸先生方、並びに地元の方に深く感謝申し上げます。

令和2年3月31日

熊本県教育長 古閑 陽一

例 言

- 1 本書は、熊本県教育委員会が平成 30、31（令和元年）度に文化庁国庫補助事業として実施した鞠智城跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡の調査は、熊本県立装飾古墳館分館歴史公園鞠智城・温故創生館が実施した。
- 3 発掘調査を実施した地点は、行政区画上、熊本県菊池市木野字堀切に所在する。
- 4 発掘調査は平成 30 年 12 月 11 日から平成 31 年 2 月 27 日まで（第 33 次）、令和元年（2019 年）5 月 29 日から令和 2 年（2020 年）2 月 27 日まで（第 34 次）実施し、岡本 真也（第 33, 34 次）、坂井田 端志郎（第 33 次）、龜田 学（第 34 次）が担当した。
- 5 発掘調査現場における遺構実測、遺物取り上げ、写真撮影は調査担当者が行った。
- 6 本書で用いる地形図は、国土地理院の 2 万 5 千分の 1 及び熊本 GP マップ、山鹿市都市計画図（5 千分の 1）をもとに作成した。
- 7 遺跡の基準点測量及び水準測量は（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
- 8 遺物の実測、トレース及び遺構のデジタルトレース、遺物の写真撮影は龜田が行った。
- 9 本遺跡の遺物及び写真、図面などの資料は、すべて熊本県立装飾古墳館分館歴史公園鞠智城・温故創生館にて保管している。
- 10 本書の執筆は、第 1 章第 1, 2 節を村 孝宏・第 3 節を岡本、第 2 章を村 が、第 3 章の 16・24～31 トレンチまでの記述を岡本が、32 トレンチ及びその他の部分については龜田が執筆した。
- 11 本書の編集は、装飾古墳館分館歴史公園温故創生館で行い、龜田が担当した。

凡 例

- 1 平面直角座標は、日本測地系を使用している。方位は、座標軸を基準とした座標北を示している。
- 2 本書に使用したレベル（L = ）は標高を示す。
- 3 本書に掲載している遺構図は、それぞれ任意の縮尺で掲載している。挿図中のスケールを参照されたい。
- 4 本書に掲載している遺物は、土器を 1/3、瓦を 1/4 の縮尺で掲載している。なお、須恵器の実測図断面は黒塗りしている。
- 5 各層位の土色及び土器の胎土の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修）による。

本文目次

第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	
第2節 調査及び整理の組織	
第3節 調査の過程	
1. 第33次調査	
2. 第34次調査	
第2章 遺跡の位置と環境	4
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第3節 鞠智城の発見と発掘調査の歴史	
第3章 調査の方法と成果	13
第1節 調査の方法	
第2節 堀切門の調査	
1. これまでの調査の概要	
2. 北西側高台の調査	
3. 門跡周辺の調査	
4. 東側土壘下部の調査	
第3節 調査のまとめ	
1. 高台の調査	
2. 城門周辺の調査	
3. 土壘下部の調査	
第4節 今後の課題	
1. 城壁の規模	
2. 登城道	
3. 堀切門内側の土壘の形状	
4. 門構造	
5. 保護・保存のために	
鞠智城跡第33、34次発掘調査（堀切門跡）出土遺物観察表	36
第4章 考察	37

図目次

第1図	九州の古代山城分布図	5
第2図	古代山城の分布図	5
第3図	鞠智城跡周辺主要遺跡分布図	6
第4図	鞠智城域図	7
第5図	鞠智城跡全体図	8
第6図	堀切門跡地形図(1/5,000)	11
第7図	堀切門跡トレンチ配置図(S=1/300)	12
第8図	鞠智城跡高台部遺構配置図(S=1/200)	15
第9図	高台部基本土層断面図(S=1/40)	16
第10図	高台部土層断面図(S=1/100)	17
第11図	高台部27トレンチ断面図(S=1/40)	18
第12図	堀切門跡14・16・20トレンチ平面図・ 土層断面図(S=1/80)	21
第13図	堀切門跡14・16・20トレンチ土層断面・ 見通し断面図(S=1/80)	22
第14図	城壁下部32トレンチ平面図(S=1/50)	23
第15図	城壁下部32トレンチ南壁断面図 (S=1/50)	24
	32トレンチ東西断面(A-A',B-B')	
	図土層注記	25
第16図	城壁下部32トレンチ北壁断面図 (S=1/40)	26
第17図	石製唐居敷実測図(S=1/25)	29
第18図	堀切門跡高台トレンチから4トレンチ 土層断面図(1/200)	30
第19図	堀切門跡22トレンチ平面図・土層断面図 (S=1/80)	31
第20図	15トレンチ実測図(S=1/60)	32
第21図	堀切門跡17トレンチ平面図・土層断面図 (1/80)	33
第22図	堀切門跡17トレンチ城壁加工痕模式図 (1/40)	33
第23図	堀切門跡10・12・18トレンチ平面図・ 土層断面図(S=1/80)	34
第24図	鬼ノ城T8・T9平面図(S=1/200)	39
第25図	鬼ノ城T8断面図(S=1/80)	39
第26図	鬼ノ城内側柱穴平・断面図(S=1/60)	39
第27図	御所ヶ谷神龍石A2トレンチ平面・断面図 (S=1/50)	40

写真図版目次

図版1	上 堀切門跡32トレンチ(南から)	44
	下 堀切門跡及び周辺土壁を見る	
図版2	1 堀切門跡高台(北西から)	45
	2 堀切門跡高台24トレンチ耕作溝検出状況 (南西から)	
	3 堀切門跡高台28,31トレンチ(西から)	
	4 堀切門跡高台27トレンチ(西から)	
	5 堀切門跡高台27トレンチ(西から)	
図版3	1 堀切門跡高台31トレンチ土層断面 (北西から)	46
	2 堀切門跡高台31トレンチ(北西から)	
	3 高台東側斜面土層堆積状況(南から)	
	4 高台東側斜面土層堆積状況(東から)	
図版4	上 堀切門跡16~20トレンチの全景 (西から)	47
	下 堀切門跡柱穴検出状況(西から)	
図版5	上 堀切門跡16トレンチ柱穴検出状況 (南から)	48
	下 堀切門跡16トレンチ南西壁土層断面 (北から)	
図版6	1 32トレンチ(東側斜面裾部)全景 (東から)	49
	2 32トレンチ(東側斜面裾部)全景(東から)	
	3 32トレンチ 裤部土層堆積状況(東から)	
図版7	1 32トレンチ 西壁土層堆積状況 (北東から)	50
	2 2トレンチ 裤部積土状況及び地山検出状況 (東から)	
	3 32トレンチ 土層断面(南東から)	
図版8	1 32トレンチ 北西壁土層断面 (南東から)	51
	2 32トレンチ 南西壁土層断面(東から)	
	3 32トレンチ 北西壁土層断面(南南東から)	
	4 32トレンチ 北東壁土層断面(南から)	
	5 32トレンチ 福部北東壁土層断面 (南西から)	
図版9	上 堀切門跡22トレンチ (北東から)	52
	下 堀切門跡15トレンチ(南から)	
図版10	上 堀切門跡4Cトレンチ 全景(北西から)	53
	下 堀切門跡4Cトレンチ 積土状況(南東から)	
図版11	堀切門跡第33・34次調査出土遺物	54

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

鞠智城跡は熊本県の北部、山鹿市菊鹿町南部から菊池市北西部にかけて所在する古代山城である。『続日本紀』文武天皇2(698)年5月の条にみえる「令大宰府緒治大野・基跡・鞠智三城」という修繕記事を初見とし、『日本文德天皇実錄』天安2(858)年2月、6月の条、『日本三大実錄』元慶3(879)年3月の条にも城名の記載がみられる。所謂「朝鮮式山城」である。現在は、熊本県が平成6年度から始めた保存整備事業により、八角形鼓樓、米倉、兵舎、板倉が復元され、平成14年度にはガイダンス施設「温故創生館」が併設され歴史公園として広く県民に親しまれている。また、平成16年2月27日には、国の史跡に指定された。

この鞠智城跡の本格的な発掘調査は、熊本県教育委員会が昭和42~44年度に実施した第1~4次調査に始まる。これは当時、熊本女子大学教授であった乙益重隆を団長とする「鞠智城調査団」によるものであった。その後、昭和62年度の第10次調査からは、文化庁国庫補助事業として毎年度継続的に調査を実施してきた。その結果、国内の古代山城では類例をみない「八角形建物跡」をはじめとする72棟の建物跡や、5,300m²という広大な面積をもつ貯水池跡、版築盛土による土壘、そして通水溝を伴う石壁など城の構造解明に伴う貴重なデータが蓄積されてきた。さらに平成20年度には、貯水池跡池尻部から百済系銅造菩薩立像が出土し、築城時期を考えるうえで重要な資料を提供した。

現在の発掘調査は、貯水池跡、城門跡、土壘線の構造解明を目的とする調査方針に基づき、概ね20年間の事業期間を念頭に年次計画を掲げた『第3次鞠智城跡保存整備基本計画』(平成28年3月策定)に基づき実施している。ただし、平成28年4月に熊本地震が発生したことから同計画の開始年度を平成30年度に変更した。今回報告を行う第33次及び第34次調査においても本計画に基づき、堀切門跡の構造把握を目的とする本調査として計画し、平成30年度及び平成31(令和元)年度の2カ年に亘って鞠智城跡保存整備検討委員会の審議・了承を得て実施することになった。

第2節 調査及び整理の組織

調査及び整理作業は下記の組織で行った。

発掘調査

第33次調査(平成30年度)

調査主体者 熊本県教育委員会

調査責任者 宗村 土郎(熊本県立装飾古墳館長)

調査総括 廣瀬 泰之(同分館歴史公園鞠智城・温故創生館長)

調査事務 八並 健児(同総務課長)、釜崎 裕子(同参事)

松葉 孝博(同分館歴史公園鞠智城・温故創生館参事)

服部 雄一郎(同主任主事)

調査担当者 岡本 真也(同主幹兼文化財整備交流課長)

坂井田 端志郎(同参事)

発掘調査作業員(50音順・敬称略)

河津 祐太郎、中原 幸子、三島 多恵子、宮本 清、宮本 定、村上 多喜子、森田 幸雄、笠 秀子

第34次調査(平成31【令和元】年度)

調査・整理主体者 熊本県教育委員会

調査・整理責任者 木下 行満(熊本県立装飾古墳館長)

調査・整理総括 村 孝宏(同分館歴史公園鞠智城・温故創生館長)

調査・整理事務 八並 健児(同総務課長)、釜崎 裕子(同参事)

松葉 孝博(同分館歴史公園鞠智城・温故創生館参事)

服部 雄一郎(同主任主事)

調査・整理担当 岡本 真也(同主幹兼文化財整備交流課長)

龜田 学(同参事)

発掘調査作業員(50音順・敬称略)

河津 祐太郎、宮本 清、宮本 定、米岡 重美

鞠智城跡保存整備検討委員会（平成30、31【令和元】年度、50音順・敬称略）

今村 克彦（元熊本城総合事務所長）、小田 富士雄（福岡大学名誉教授）、小畠 弘己（熊本大学大学院教授）、小西 龍三郎（元九州造形短期大学教授）、坂上 康俊（九州大学大学院教授）、佐藤 信（東京大学名誉教授）、田中 哲雄（元東北芸術工科大学教授）、山尾 敏孝（熊本大学大学院先端科学研究院シニア教授）

調査指導及び協力者（順不同・敬称略）

甲元 真之（熊本大学名誉教授）、熊谷 公男（東北学院大学名誉教授）、堀江 潔（佐世保工業高等専門学校）、西住 欣一郎、阿南 亨（菊池市教育委員会）、渡邊 一徳（熊本大学名誉教授）、中原 定蔵、宮本 清英、村上 文康（菊池市堀切区）、矢野 健吾（山鹿市米原区）、山口 健剛、牛島 桃子（山鹿市教育委員会）、長谷部 善一、矢野 裕介、木村 龍生、井鍋 譲之（熊本県教育庁文化課）、三木 ますみ、菊川 知美（熊本県立装飾古墳館）

第3節 調査の過程

(1) 第33次調査

第33次発掘調査は、平成30年(2018年)12月11日(火)から平成31年(2019年)2月27日(水)まで実施した。12月11日、調査開始。

12日、A区高台に擬立柱建物の検出を想定して3mのトレント幅を確保して24トレント(3m×10m)を設定、手掘りで掘削を開始。深さ約15~20cmで阿蘇熔結凝灰岩(Aso-4)の風化粘土層(地山)に到達。

14日、4級基準点測量とメッシュ杭設置作業を実施。

21日、25トレント(3m×3.7m)、26トレント(3m×3.2m)を拡張して遺構の有無を確認したが、耕作痕跡と考えられる溝の切り合いが見られるだけで、当時の遺構は残存していないことが判明。

1月 8日、27トレント(3m×5.8m)を設定し掘削を開始。また、門跡周辺16トレントと20トレントの再確認調査も開始。

9日、27トレントの表土から龍泉窯系青磁碗の破片や近世以降と考えられる陶器片が出土。深堀の中位層から板ガラス片が出土。高台の旧地権者、中原定蔵氏の聞き取りを実施。

10日、24トレントに直行する28トレント(3m×3.5m)、29トレント(3m×3m)を設定して、掘削を開始。29トレントでは耕作時の工具痕跡と思われるものを確認。26トレントと27トレントの間を30トレント(3m×0.5m)とし、28トレントに接続して31トレント(3m×5m)を設定。

17日、30トレントを掘り下げたところ、北西-南東側に地山を切るラインを確認。

18日、31トレントの断面観察の結果、黒色土がなだらかに高くなり途中で切られていることから地形が元々高かったことが判明。27トレントでは、約2.5m下で地山を確認、急激な掘削が行われていることが判明する。

23日、20トレントでは土嚢袋を除去し、道路跡や門柱痕跡の一部を再度確認した。

24日、高台調査区の平面図と断面図の作成を開始する。

25日、27トレント最下層で2つの土抗状の落ち込みを確認。

29日、西住氏(菊池市教委)が来跡。31トレントの土層断面から一部盛土があった可能性について助言をうける。

30日、高台の平面図と断面図を完成させる。

2月 1日、小田委員長の調査指導を受ける。

①高台については当時の遺構は消滅している。②門跡については、唐居敷と門柱痕跡を入れた平面図、懸門の構造が分かるように道路硬化面などを入れた断面見通図を作成すること。③埋め戻しの際は雨水が抜けるような処置をすべき。

とのアドバイスを受ける。

14日、小畠委員の調査指導を受ける。①以前の発掘調査の再検証が主体であること。②全体断面図は反転して見やすく作成すること。③唐居敷の実測図は取り直して平面図に入れ込むこと。などのアドバイスを受ける。

18日、西住氏が来跡。高台の27トレントの急角度の掘削について、城壁を削る技術があるので、古い可能性も残る。31トレントは黒色層以前の造成が鍵となるなどの助言を受ける。

19日、第2回鞠智城跡保存整備検討委員会で現地協議。27トレント、30トレントの急激な落ちは昭和40年

代の掘削か？その確認のためにもグリッド杭を外して断面を確認することが必要（小畠委員）、門跡の埋め戻しに際して、地下水の問題を解決することが重要。山尾委員に意見を聞いた方が良い（小田委員長）。高台の断面に含まれる粘土ブロックについて、地質の専門家（渡邊一徳氏）の意見を仰ぎ、造成土がどこに由来するのかを確認する必要がある（小田委員・小畠委員）。門周辺の見やすい縦横断面図を作成してほしい（佐藤委員）。

26日、渡邊一徳熊大名誉教授の調査指導を受ける。高台造成土内のブロック粘土は、阿蘇溶結凝灰岩（Aeolite）の風化土壤に由来するもので、この周辺の土である。凝灰岩は、水が通ると風化が早くなる。数十センチ違うだけ粘性の度合いが異なる。プライマリーな崖面に見られる拳大の丸い褐色の塊は、岩石が風化した痕跡である。黒色土のカーボンで年代測定も可能。

27日、山尾委員の調査指導を受ける。高台について、造成以前の地を航空写真や地図を使って復元できれば良い。門跡の埋め戻しについては、凝灰岩の面に山砂を敷いて土嚢で埋め戻す。水抜きのために径20cm程度の塩ビ管を埋め込む。この方法が一番安価でやり易い。しかし、応急的な対処法でしかない。

（2）第34次調査

第34次発掘調査は、令和元年（2019年）5月29日（水）から令和2年（2020年）2月27日（木）まで実施した。

5月29日、城壁構造確認のためにNb32トレント（1.5m×8.3m）の調査を開始。表土下、75cmで近世陶磁器が出土する。

6月8日、矢野参事、井鍋参事が来跡。32トレントにおいて、互層積土であるキーポイントは白色粘土層であるとの助言を受ける。また、最下段は明治期の道路掘削に伴う擾乱である可能性が高いと指摘される。

11日、全体的に白色粘土と凝灰岩砂質土を基本とした互層を確認。

12日、山鹿市教育委員会の山口氏・牛島氏、装飾古墳館の三木氏・菊川氏が来跡。三木氏から白色粘土層の下に見られる凝灰岩礫の堆積は、掘削した凝灰岩の残土を廃棄したものではないかとの指摘を受ける。

13日、菊池市教育委員会の阿南氏、西住氏が来跡。

19日、32トレント上段の深堀トレンチで凝灰岩盤を掘り込むピット状の遺構を確認。ピット内にはやや丸みを帯びた両拳大の凝灰岩が敷き詰められていた。版築を行う際の檻板の設置に伴う柱痕跡の可能性が考えられる。ピットから約1m北西側では径9～11cmの安山岩の円錐1点が出土した。

20日、32トレントの平面図、東西断面図を作成。

7月4日、高台27トレントの土層堆積状況確認を実施。3つのステージがあることを確認。

6日、甲元熊大名誉教授の調査指導を受ける。上段は飛鳥時代の積土層であることを指摘される。

7日、小畠教授の調査指導を受ける。

9日、第1回整備検討委員会を実施。小西委員より唐居敷の門碑石と軸摺穴の位置関係について指摘。佐藤委員より堀切門の上屋構造を含めた復元について質問あり。

21日、現地説明会を実施（参加者45名）。

25日、雨水圧により、門碑石周辺の16・20トレント間の土層ベルトに亀裂が入り一部が崩落したため、今後の対応について県文化課と協議。崩落部分を調査して、記録に残すこととした。

11月12日、上段31トレントの埋め戻し作業、32トレントの土層断面実測、16、20トレント間の土層ベルト調査を実施。土層ベルトの崩落は、上層のみで古代の層は残存していることを確認。

12月4日、25トレント東側崖面で阿蘇溶結凝灰岩の土層堆積状況（風化土壤の粘質土層から凝灰岩までのプライマリー層）を確認、断面図を作成。16、20トレントの埋め戻し作業を実施。水抜き用の塩ビ管を設置しながら、花崗岩バイラン土の山砂、不織布、土嚢、土の順に埋め戻す。

1月15日、32トレントの埋め戻し作業を実施。

2月13日、16・20トレント、上段27トレント、25トレント東側崖面埋め戻し完了。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

鞠智城跡は、阿蘇外輪山麓から有明海へと西流する全長 71km をはかる菊池川の中流域に所在する。菊池川の中流域には肥沃な菊鹿盆地が広がり、北東部には八方ヶ岳（標高 1,052m）がそびえる。鞠智城跡は八方ヶ岳から南西に延びる丘陵の先端部分に形成された「米原台地」と呼ばれる標高約 145m の台地上に位置する。この米原台地の南側には菊鹿盆地が広がり、西側は初田川の浸食作用によってできた谷地形に面しているため、周辺の地形から独立した様相を呈している。そのため、標高は約 145m と微高地ながらも周辺の眺望は開けており、南側は菊鹿盆地から遠くは熊本市、南西側は金峰山系から雲仙普賢岳、東側は阿蘇外輪山を望むことができる。また、鞠智城跡の西側約 30km には有明海が広がるが、その間を金峰山系に阻まれ、鞠智城跡から直接有明海を望むことはできない。また、北側は八方ヶ岳を主峰とする 1,000m 級の山々からなる筑肥山地が横たわっており、地形的に鞠智城跡は北側の山々を背後として、南側を望むようなロケーションにあるといえる。なお、大宰府政府から鞠智城跡までは南東の方向に直線距離で約 62km 離れている。

今回の第 33 次、34 次調査を実施した堀切門跡は、鞠智城跡の南に位置し、東西に延びる舌状丘陵から南東方向に開いた浅い谷地形に所在する。当該地は、古くから堀切集落（菊池市）と米原集落（山鹿市菊鹿町）とを結ぶ連絡路としての役割を果たしており、現在の地形からも三つの道があったことが確認できる。一つは谷の開口部から延びて南西壁際の堀切状地形を通る道である。もう一つは、これも谷の開口部から延びて城壁中段のテラス状平坦面を通る中央斜面を九十九折れ状に登る道である。両者は中央斜面（城壁）上位付近で合流し、上方へと向かう。また、丘陵の尾根筋を通る「御倉払い」と呼称する道がある。この道も中央斜面上位で 2 道と合流し、北東方向へと抜ける。このように、堀切門跡周辺は後世においても通行の要所としての役割を果たしてきた。これは、当該地が丘陵の南斜面のうち唯一の谷地形で、南から北への丘陵越えの最も容易な箇所であることに起因するものと思われる。また、堀切門跡の北西には狹隘な谷部が所在し、南側土塁線と西側土塁線の尾根状地形が切れる場所に池ノ尾門跡が所在する。この谷部は、鞠智城跡の中で最も低い位置にあり、標高は約 90m をはかる。谷部の南西側には南側土塁線の尾根の斜面裾に沿って幅 1m ほどの小河川「塩井川」が流れ、北側には水路が流れる。北側の水路は谷の最狭部で塩井川と合流し、その後塩井川は西流し、池ノ尾門跡から約 600m 先で内田川水系の初田川に注ぐ。塩井川が初田川に合流する地点には「大門」という地名が残っており、鞠智城に間連する地名であると考えられている。塩井川に沿って現在、市道下本分・堀切線が通っており、池ノ尾門跡が所在する谷の北側斜面裾を通り、鞠智城内へと至る。大門から池ノ尾門跡までは狹隘な谷地形が続くが、池ノ尾門跡を通り城内に入ると、米原台地と南側土塁線の尾根に囲まれた盆地状地形が広がる。

第2節 歴史的環境

鞠智城跡が所在する地域には数多くの遺跡が残されている。ここでは、鞠智城跡と関わりの深い古代の遺跡を中心概観する。

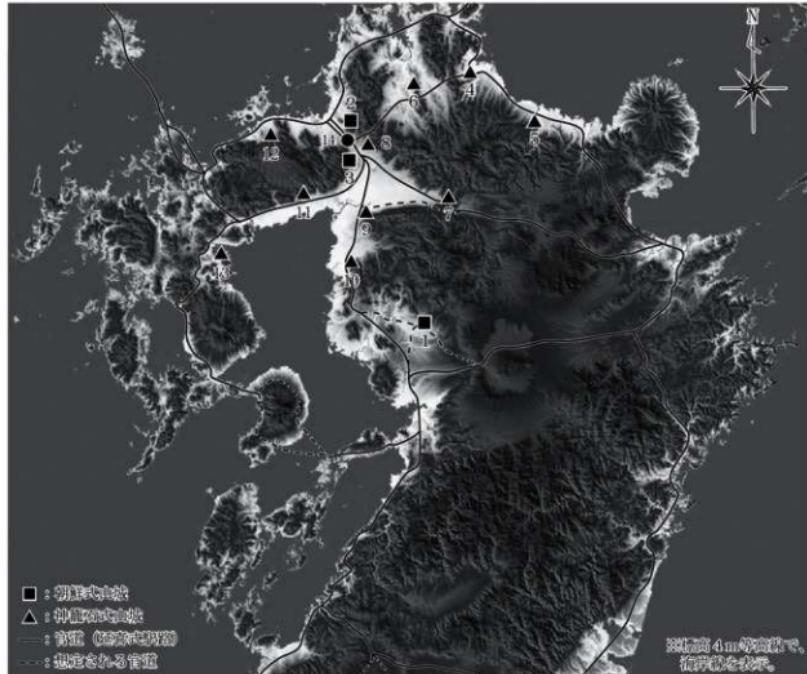
鞠智城跡周辺の古代の遺跡としては、御宇田遺跡群（山鹿市）、上鶴頭遺跡、うてな遺跡、十蓮寺跡、西寺遺跡（菊池市）などがある（第 3 図）。

御宇田遺跡群は、鞠智城跡の西側約 4.5km の御宇田台地上に位置する。昭和 60 ~ 61 年にかけて発掘調査が実施され、そのうち妙見第 II 区の調査では 8 ~ 9 世紀のものと考えられる 3 間 × 5 間の庇付き建物などの据立柱建物群が中央広場を挟んで規則的に配列されて検出された。また、石製巡方や円面鏡など官衙遺跡から出土することが多いとされる遺物や、越州窯青磁などの当時貴重とされた貿易陶磁器などが出土しており、山鹿郡家であった可能性も指摘されている。

上鶴頭遺跡は、鞠智城跡の南西約 6.5km の洪積台地上に位置する。昭和 57 年に調査が実施され、30m 四方の中央広場を囲むように 9 世紀前半を中心とする 16 棟の庇付き大型建物跡が検出された。また、「正」「西正」等の文字が書かれた墨書き土器が 20 数点出土しており、官衙に間連する遺跡ではないかと考えられている。

うてな遺跡は、鞠智城跡の南西 2.5km の台地西側端部に位置する。これまで 3 次にわたる調査が実施されており、七ツ枝 II 区からは 8 世紀後半 ~ 9 世紀前半の規則的な配置をする据立柱建物群が検出された。また、三彩片や銅楳片、墨書き土器などが出土しており、官衙に間連する遺跡ではないかと考えられている。

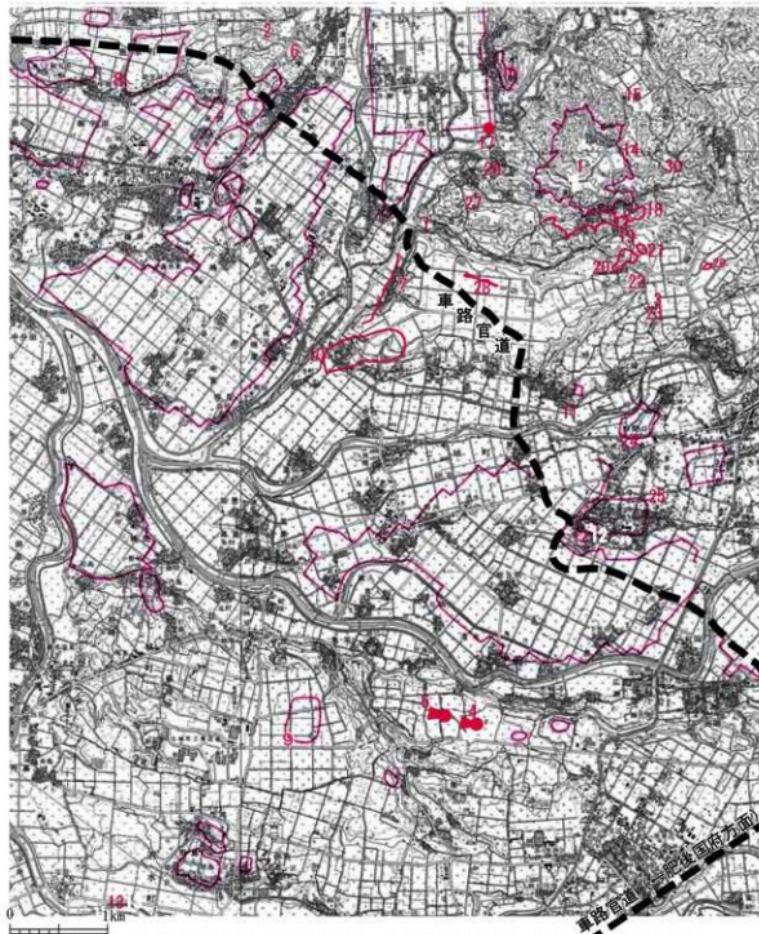
十蓮寺跡は、鞠智城跡から真南に約 2.5km 離れた台地の南側斜面に位置する。これまでの踏査や 1965 年に実施された発掘調査によって、奈良時代中期の鴻臚館式瓦の特徴をもつ軒丸瓦 2 種、軒平瓦 2 種が確認されており、菊池郡



1 : 鞠智城 2 : 大野城 3 : 基肄城 4 : 御所ヶ谷神籠石 5 : 唐原山神籠石
6 : 鹿毛馬神籠石 7 : 把木神籠石 8 : 阿志岐城 (宮地岳神籠石) 9 : 高良山神籠石
10 : 女山神籠石 11 : 带隈山神籠石 12 : 雷山神籠石 13 : おつぼ山神籠石 14 : 大宰府
※官道は、日野尚志2007『古代の官道』鞠智城・温故創生館館長講座資料を基にしている。

第1図 九州の古代山城分布図





1. 駒智城跡 2. 津袋古墳群 3. 製糸尾高塚古墳 4. 木椎子フタツカサン古墳 5. 木椎子高塚古墳
 6. 駒塚塚古墳 7. 濱戸口横穴群 8. 関宇田遺跡群 9. 上鶴頭遺跡 10. うてな遺跡 11. 十津寺跡
 12. 西寺遺跡(郡家) 13. 麦原遺跡 14. 繩掛松古墳 15. 黄金塚古墳 16. 繩掛松遺跡
 17. 頸合古墳 18. 山田横穴群 19. 繩画之口遺跡 20. 大井通横穴群 21. 大井通谷横穴群
 22. 製糸尾丸山古墳 23. 製糸尾茶臼塚古墳 24. 神来遺跡 25. 条里跡 26. 阿高礎石群 27. 阿高横穴群
 28. ヒジュウ谷横穴群 29. 嶺切横穴群 30. 同田刀工星敷跡

第3図 駒智城跡周辺主要遺跡分布図



第4図 鞠智城城域図



第5図 鞍智城跡全体図

家に付属する菊池郡寺とも考えられている。また、伽藍配置は、古代肥後國のほかの郡寺と同様に法起寺式と想定されている。

西寺遺跡は、鞠智城跡から南に約4km離れた菊池川右岸の菊池平野部に位置する。遺跡が所在する西寺地区の北側と西側には、幅5~6m、高さ1.5mの土塁が確認されている。また、南西約300mに位置する南園地区からは8世紀末~9世紀初頭の多量の布目瓦が出土しており、この周辺一帯を菊池郡家に比定する説もある。

このほか、菊池川流域や内田川流域には、大規模な条里の地割りが遺存している。また、延喜式以前の古代官道もこの地域を通っている。そのルートは、大水駅（熊本県玉名郡南闇町）から御宇田遺跡群を通って、台台地に至り、そこを斜めに通過しながら西寺遺跡に至るものである。官道は、西寺遺跡からさらに南東へ進み、花房台地で肥後國府方面へと通じるルートと阿蘇を経由して豊前・日向の国府へと通じるルートと分岐する。

なお、鞠智城跡の地理的・歴史的環境については、これまで刊行された鞠智城跡の発掘調査報告書でも詳しく述べられているので、併せて参照いただきたい。

【参考・引用文献】

熊本県・熊本県教育委員会編 2020「鞠智城跡の地理的・歴史的環境」『鞠智城東京シンポジウム古代山城鞠智城を考えるII 東アジアの中の古代鞠智城 鞠智城の調査と成果』熊本県・熊本県教育委員会

第3節 鞠智城の発見と発掘調査の歴史

鞠智城については、江戸時代後半から国学者・地誌学者等による研究がみられる。八木田桃水は、『新撰事史蹟通考』や『桃源問答』において、菊池市木庭や深川に所在する菊地氏初代以来の居城である「菊之城」は鞠智城を改変したものであるとの考えを示した。洪江公正は、『菊地風土記』(1794年)に、『文德実錄』の天安2(858)年「菊地郡不動倉十一字火」の記事を菊鹿町米原村長者屋敷に比定し、『肥後國誌』では菊池市隈府、七城町水島、菊鹿町米原等に及ぶ広域な範囲を鞠智城域と推定している。

その後、昭和初期には毎日新聞記者の中島秀雄が、礎石や焼米の層や「涼みケ御所」等の地名の存在から菊鹿町米原を「鞠智城」に比定している。また、地元の考古学者坂本経堯が米原地区において踏査を行い、昭和12(1937)年「鞠智城趾に「擬せられる米原遺跡について」(『地歴研究』第10篇第5号)や、昭和17年(1942)「鞠智城考」(『日本談義』通巻51号)等で菊鹿町米原一帯が「鞠智城跡」であると推定した。昭和31(1956)年には、滝川政次郎が菊池古文化調査団を組織して礎石列の測量を行ったり、昭和33(1958)年に「鞠智城の調査保護計画」を熊本県に陳情したりする動きがある中で、坂本は昭和34(1959)『熊本の歴史』(熊本日日新聞社)に、米原遺跡が鞠智城跡であるとの見解を掲載した。

昭和34(1959)年、熊本県教育委員会は長者山礎石群(山鹿市菊鹿町米原字長者530)、深迫門礎石(菊池市木野字深迫1907)を「伝鞠智城跡」として県史跡に指定した。

昭和40年代になると長者山において山林開発等で礎石の一部が抜き取られる等の行為が発生し、熊本女子大教授の乙益重隆を団長とする「鞠智城跡調査団」が組織され、昭和42(1967)~44(1969)年度にかけて、4次に亘る発掘調査が実施され「深迫」、「堀切」、「池ノ尾」の門礎石、馬こなし・三枝の石垣、長者山、長者原、宮野、佐官など地区の確認調査、及び土壠線の測量調査が実施された。この調査により、城の規模、構造等が把握され「鞠智城跡」の所在地が確定したことから、昭和51年(1976)年「伝鞠智城跡」から「鞠智城跡」に史跡名称が変更された。

昭和54年度には、菊鹿町教育委員会による町道拡幅工事による第5次調査が実施され、上原地区の西縁で単弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土している。昭和55(1980)年度から昭和57(1982)年度には、文化庁国庫補助事業で重要遺跡確認調査を実施し、宮野礎石群や米原台地の測量調査を行い、それまでの調査成果を総括する報告書が出された。

その後、昭和61(1986)年度から重要遺跡確認調査が再開され、平成元年(1989)度まで航空写真撮影や長者山礎石群、礎石・掘立柱併用建物群、掘立柱建物群、古墳時代の集落跡などが検出されている。平成2(1990)年度から4(1992)年度は、国の補助金に加えて県の特別調査費で長者山裾部等長者原地区の発掘調査を実施し、3間×10間の掘立柱建物群ほか第I期を中心とする建物群を検出している。平成3(1991)年度は、長者原東側、上原地区の発掘調査を実施し、八角形建物跡を検出している。平成4(1992)年度は、長者原中央地区で礎石建物を検出している。また、国指定に向けて、発掘調査だけではなく、関連分野の専門家の指導を受けて「鞠智城跡保存整備基本構想」を策定した。平成5年度からは、策定された「鞠智城跡第1次保存整備基本計画」に基づき、鞠智城跡保存整備委員会の指導・助言を得ながら整備並びに発掘調査を実施している。平成6(1994)年度以降は、深迫門や堀切門などの門跡、西側土壠線

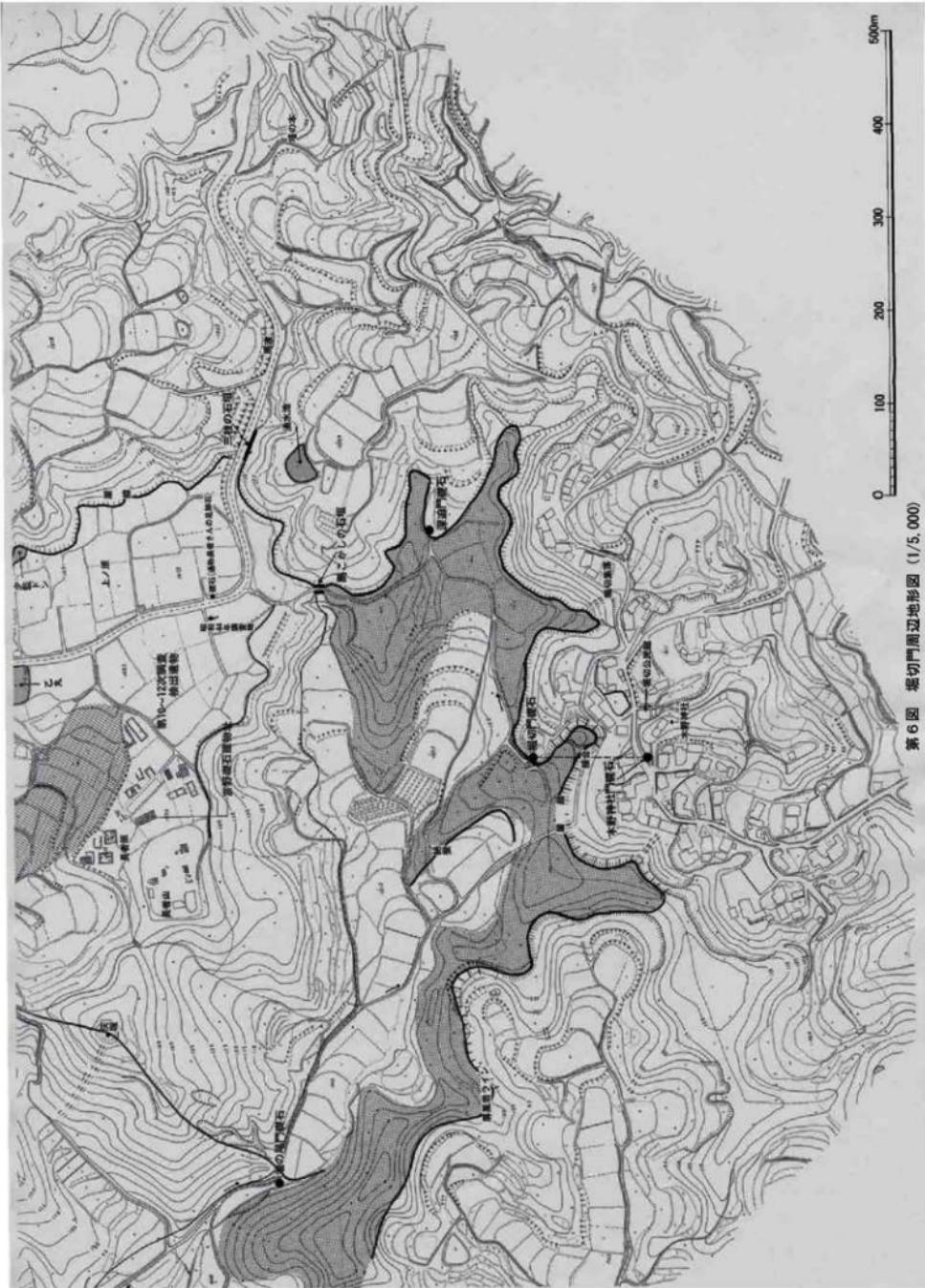
などが調査され、内托式の土壘の構造や版築などが確認されている。平成8年(1996)年度より北側の谷部では貯水池跡が確認され、木簡・百済系銅造菩薩立像・円面鏡等が出土し、貯木場や木組造構などの重要な遺構が発見された。

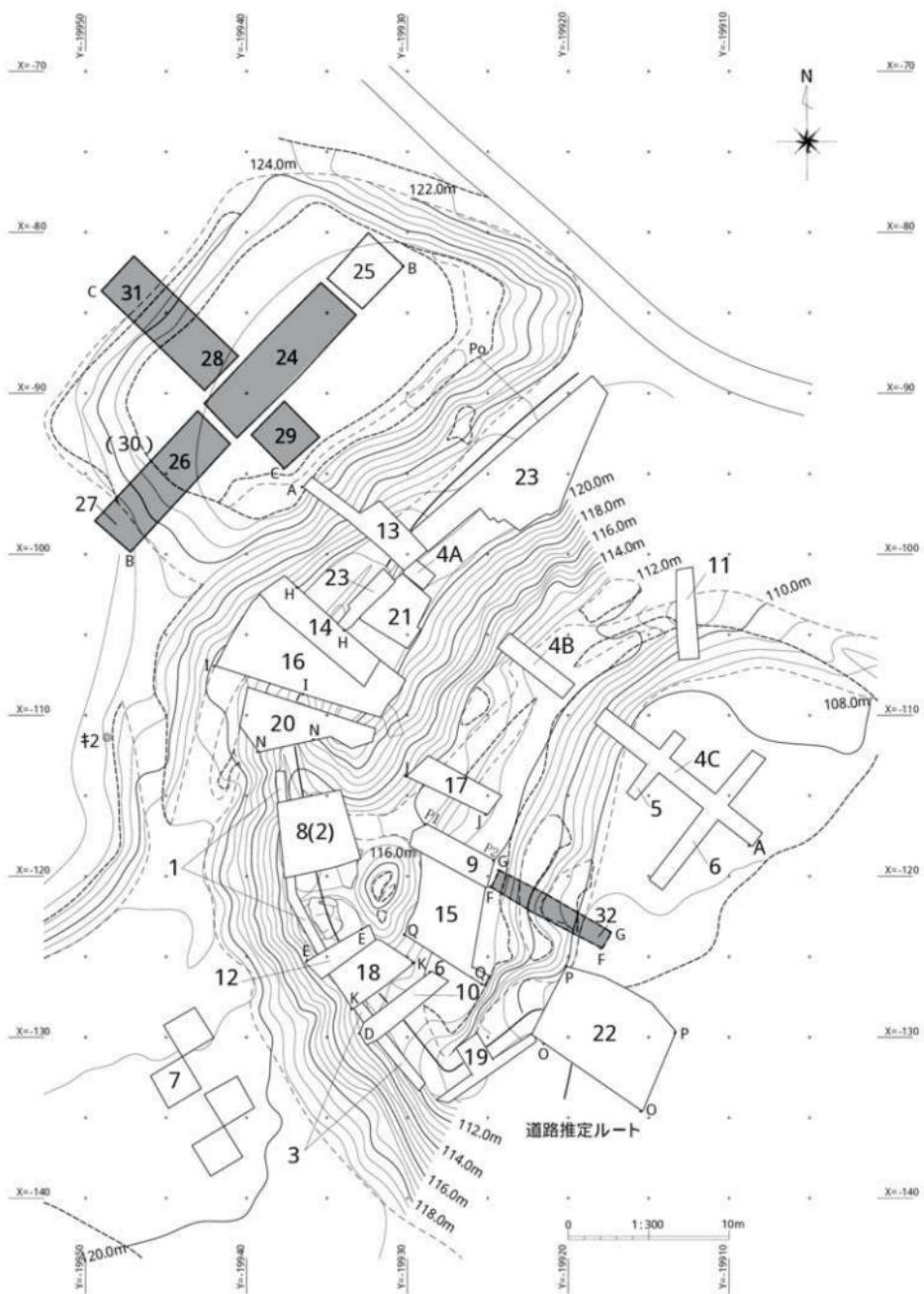
今回報告する発掘調査概要是、『鞠智城跡第3次保存整備基本計画』平成30(2018)年度からは、『鞠智城跡第3次保存整備基本計画』をもとに、城門・土壘の整備を中心に、門地区の発掘調査を行い、その成果によって明確になったデータを基に門の整備のあり方について検討していく予定である。



長者原地区（南西から）

第6図 塙切門周辺地形図 (1/5,000)





第7図 堀切門跡トレーニチ配置図 ($S=1/300$) *数字はトレーニチ番号

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

発掘調査

堀切門跡の調査は、これまで第1次調査と第20～23次、第33、34次調査の7次に亘って実施されている。高台に設けたトレントについては、平成30年度(2018年度)に表土から人力で掘削した。写真撮影は中判(6×7インチ；プローニー版)とAPSサイズのセンサーを持つデジタルカメラで行い、平面図及び断面図を1/20で作成した。高台上部については27トレント以外平成30年度中に埋め戻した。斜面部に設けたトレントは、令和元年度(2019年度)に断面等について、他のトレント等との土層を比較するなど再検討し、実測図の修正後、埋め戻しを実施した。

土塁外壁の下部については、令和元年度(2019年度)に人力での掘削を実施し、写真撮影を中判(6×7インチ；プローニー版)とAPSサイズのセンサーを持つデジタルカメラで行い、実測図を作成後、上部において遺構と判断したピットに真砂土を約20cmの厚さを入れて、土嚢袋を敷いた上から、土砂で埋め戻し作業を行った。

第2節 堀切門の調査(図B-1)

(1) これまでの調査の概要(第7・12・13・19～23図)

当該門跡にかかる登城道は、阿蘇熔結凝灰岩の崖地の南西側を掘り切って通路を通してしているのが特徴である。通路は、幅1.8～2.7mを測る。下位に枠形にクランクする登城道が造られている。門柱穴1基を検出していておおよその門の位置が推定できる。柱穴や登城道の硬化面の段差から約1.2mの懸門構造であることが確認されている。

① 堀跡(第7・12・13図)

通路上方傾斜変換点の唐居敷(からいしき)の少し上段に門の支柱の柱穴(約1/5程度)を1基検出している(16トレント)。そのため、門扉(唐居敷；からいしき)が存在する位置がほぼ特定できる。柱を検出した位置で硬化面を検出し、門前面の約1.2m下に硬化面を検出していることから、約1.2mの比高差がある懸門(けんもん)構造と推定している。唐居敷には軸摺穴が直径16cm、深さ15cmで鉄製の軸摺金具が入っていた痕跡が残存する。軸摺金具の芯から芯までは2.8mである。このことから、扉の厚さは16cm以上である。柱穴からは40cm以上で大きても50cm程度である。

② 登城道(第7・19・23図)

城域の南中央に位置し、阿蘇熔結凝灰岩の崖地の南西部を掘り切って通路を通している。石塁や土塁を築き、谷を狭めて造る深迫門や池ノ尾門等とは異なる造り方である。現況では、深迫門より傾斜がきつく傾斜角は約20度の登場道である。堀切門と同様に西側の土塁側に登城道があると考えられている。

③ 土塁(第7・18～22図)

城内側、堀切門東側部分には土塁が築かれていたと推定できるが、段々畠になってしまっており、明確な土塁は構造を確認するのは難しいが、部分的に土塁の痕跡の可能性がある部分が観察できる。

堀切門の城内側には北西側の高台方向に土塁がすりついていたと考えられるが、現状では土塁の上部が削平されていると考えられ、形状が明確でない。

西側の土塁は、北西側高台から崖面に沿って土塁が築造されていた可能性が高いが、段々畠造成のため、明確な土塁の痕跡は見られない。

城内に入った正面には現状で唐居敷が置いてある箇所付近に平場が少し見られるが、土塁が削平された折に造成されたと見られる。そのため、まっすぐ城内に入る登城道ではなく、西側の高台部分へ行く通路と東側土塁へ登っていく通路との左右に分歧していたと考えられる。土塁や高台に登れなければ、城内に侵入できない構造であり、防御性を高めるための工夫であろう。

城壁の概要を示すトレントは4トレントである。標高約120m付近で凝灰岩の地山を検出している。上層に10cmの凝灰岩を基調とした黄色味を帯びる土が堆積するが、後世のものである可能性が高い。中段の4Bトレント(図B-4-2)では、111.5m付近から積土が確認されている。茶褐色の粘質土が10cm程度の厚さで検出され、その下に凝灰岩礫を多めに含む灰褐色のサラサラしている土を含む層が35cmの厚みが堆積している状況が見られた。さらに、その下に厚さ10cm程の茶褐色粘質土が堆積し、その下に凝灰岩礫を多めに含む灰褐色のサラサラしている土を含む層を20cmの厚さ検出している。これらは、粘土を張ったステップ状のもので積土と考えられている。積土の上には、厚さ55cmの堆積があり、道路もしくは溝等が検出されている。これらは、現状平坦に造成されていると考えられ、凝灰岩の壁を削り、新しい時期に通路として利用されたと考えられる。下段は、城壁から2.5m

部分平坦に造成された面が残存し、標高 107.2m付近で黄色・赤色粘土で凝灰岩礫を含む硬い層を検出している。

中段に設定した 17 トレンチ（図 B-4-5）では、城壁部分標高約 113mから標高 113.8mの凝灰岩の壁に、繊痕跡が残存した。同じく中段に設定した 9 トレンチ（図 B-4-3）では、標高 111m下から黄褐色粘質土と灰褐色（凝灰岩を顯著に含む層）の積土が確認された。

（2）北西側高台の調査（第 7 ~ 11 図）

①現況

北西側高台部分周辺は段々畑に造成されているが、今回調査をした部分は、現状で一番高い部分であり、地形がどれくらい残存しているか、土壘状の積土の痕跡や橋等の遺構の有無が、注目された。現況では、高台の平坦面で一番高いところで 125.3m、北西側が低く南東側が 126.4mを測り、約 90cmの比高差がある。

②基本土層（柱状土層図 B-1）

高台部分の土層堆積を基本土層として記述する。

高台の上部は削平され、5 cm程の厚みの表土直下に耕作土と推定できる褐色シルト（Hue7.5YR）（凝灰岩の粘質の 3 ~ 10mm ブロックを含む）が 15cm程の厚さで堆積している。北西側高台部分の地山は ローム層（Hue7.5YR6/6 橙色粘質土）である。標高は約 125.2mで、厚さは、約 85cmである。（地山 I 層；ローム 1 層）

以下、地山の堆積が見られるので、記述する。北西側高台の通路部分西側の壁を基本土層として記述する。

地山 II 層（ローム 2 層）：明赤褐色粘質土（Hue5YR5/8）2 ~ 5mm の黒色粒（鉱物の風化粒か）を含む。所々に 2 ~ 10mm 大の軽石の風化粘土（茶色）を含む。

地山 III 層（ローム 3 層）：標高 123.2m では灰褐色シルト層で明赤褐色粘質土が混じる凝灰岩層とローム層の漸移層である。

地山 IV 層（凝灰岩 1 層）：標高約 123m で、凝灰岩の風化土の上位の層である。褐灰色を呈する。

地山 V 層（凝灰岩 2 層）：標高 122.7m で結核凝灰岩の風化土だが、土壤化しており、焼結度は低い。粘性は高くない。

地山 VI 層（凝灰岩 3 層）：標高約 122m で焼結凝灰岩の焼結度が弱い部分である。

③調査の成果

1) 調査の方法

堀切門跡の北西側に広がる高低差約 5 ~ 6 m の高台（南東 - 北西 : 縦 11 ~ 14m 南西 - 北東 : 横 18 ~ 22m 面積約 240m²）に角棟の様な遺構が存在したか否かについて確認を行うためにトレンチ調査を行った。

トレンチは建物の柱穴等の検出を想定して、幅 3m で南東 - 北西長さ 23.4m（24 トレンチ : 10.5m、25 トレンチ : 3.6m、26 トレンチ : 2.4m、27 トレンチ : 6.3m、30 トレンチ : 0.6m）、南西 - 北東長さ 11.8m（28 トレンチ : 2.5m、29 トレンチ : 3m、31 トレンチ : 6.3m）を設定した。

Ⅱ) 遺構（第 7 ~ 8 図）

高台平坦部では、0.15 ~ 0.2 m の掘削で地山（阿蘇 4 火砕流堆積物の風化土壤）に達し、掘削深度は平坦部で 0.3 ~ 0.4 m である。

幅 15 ~ 20cm で、深さ 0.03 ~ 0.12 m の U 字状の溝が南東 - 北西方向に 12 条、南西 - 北東方向に 4 条確認された。南西 - 北東方向の溝が南東 - 北西方向の溝を切る傾向が見られる。約 3m 間隔で北東方向から南西方向に南東方向の溝が南東方向から北西方向には 1.5m 程の間隔の溝が重複している状況と推定できる。

いずれの溝からも遺物の出土はなかった。

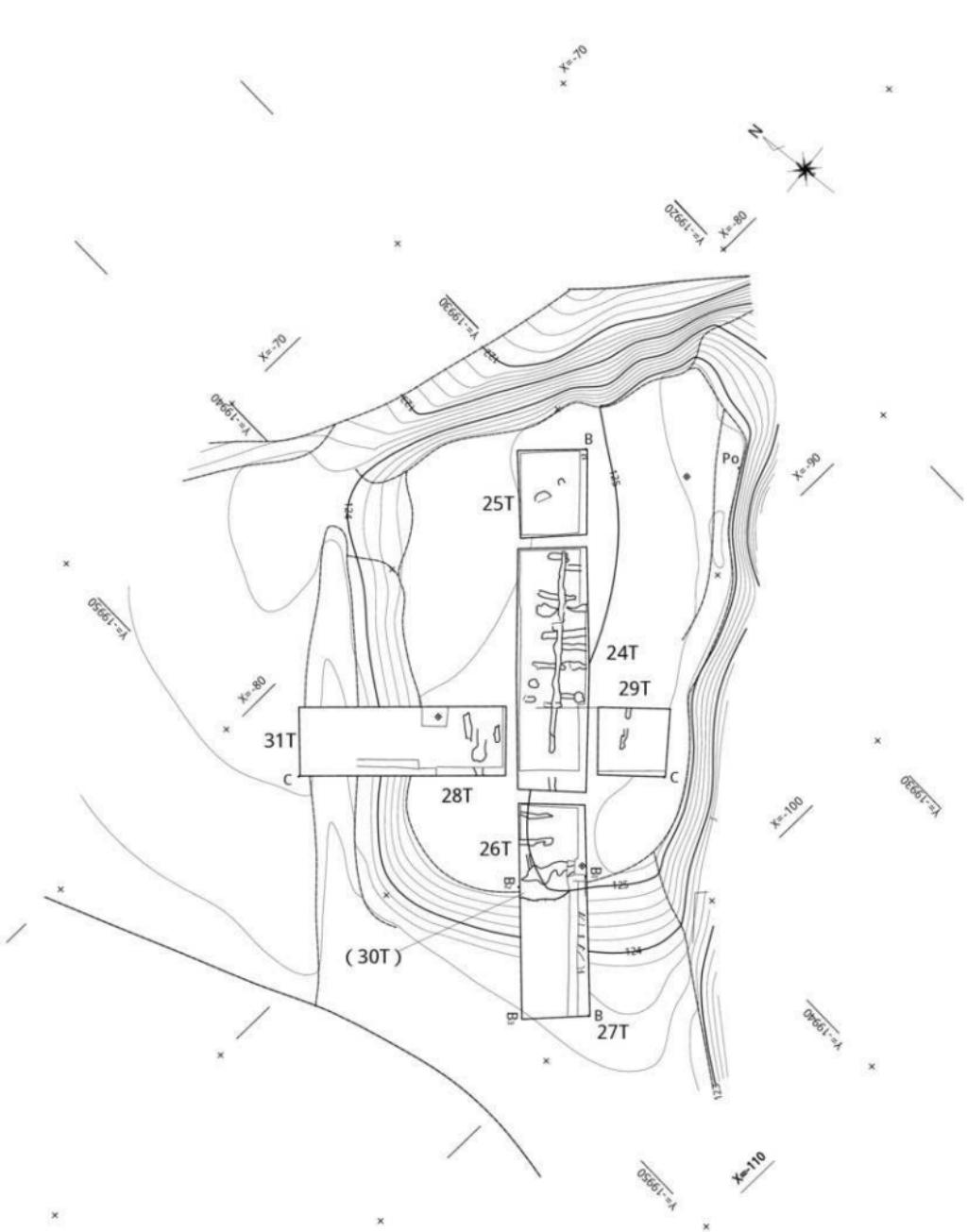
Ⅲ) 高台斜面部の堆積（第 7 ~ 9 ~ 11 図）

[27 トレンチ]

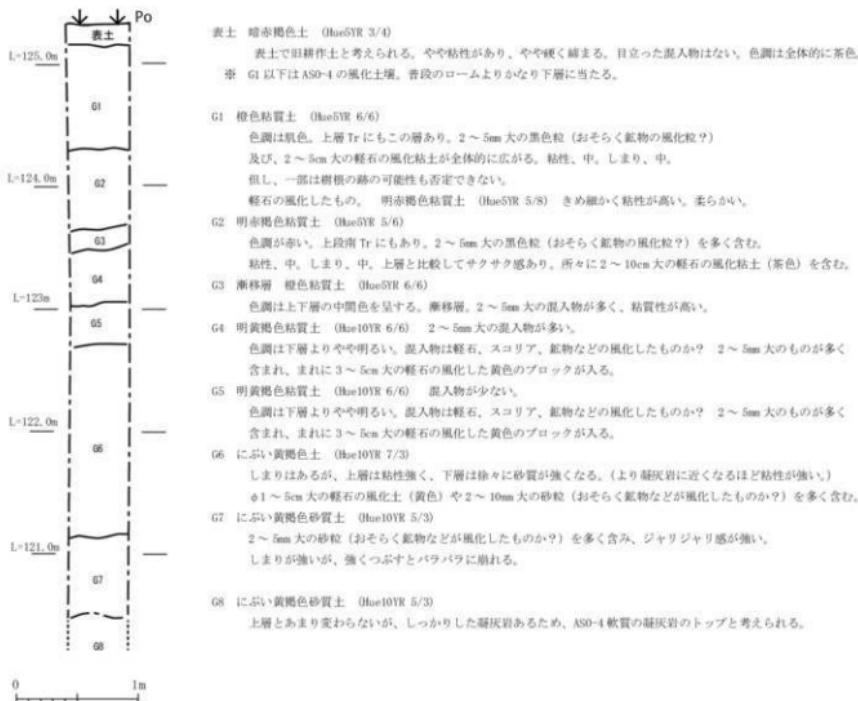
高台端部の 27 トレンチは深さ 0.45 ~ 2.2 m 掘削した。27 トレンチの深堀調査（幅約 0.5m、最深部 2.2m）では、約 75 度の傾斜角度で高さ約 2m に及ぶ掘削が確認された。土層は、大まかに上・中・下層の 3 層に分層できる。

上層は、地山の拳大 - 人頭大のブロック土を含み、上層最下部でガラス片が出土していることから聞き取り調査で判明した昭和 40 年代の整地作業に伴うものと推定できる。

中層は、主に凝灰岩に起因する土を含み、互層堆積であることから、上層の堆積とは大きく異なる。中層か

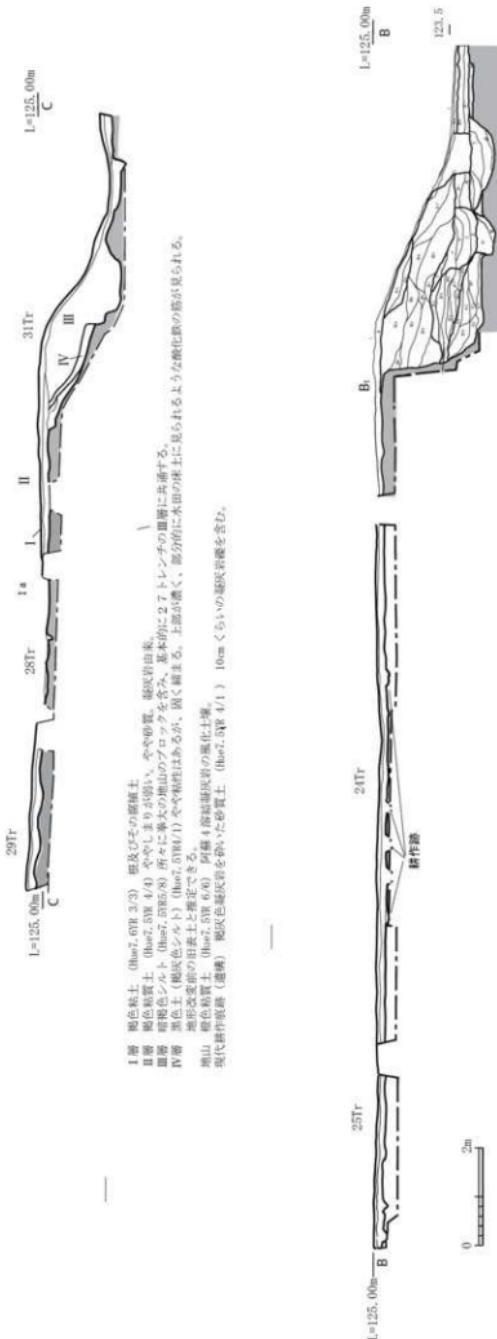


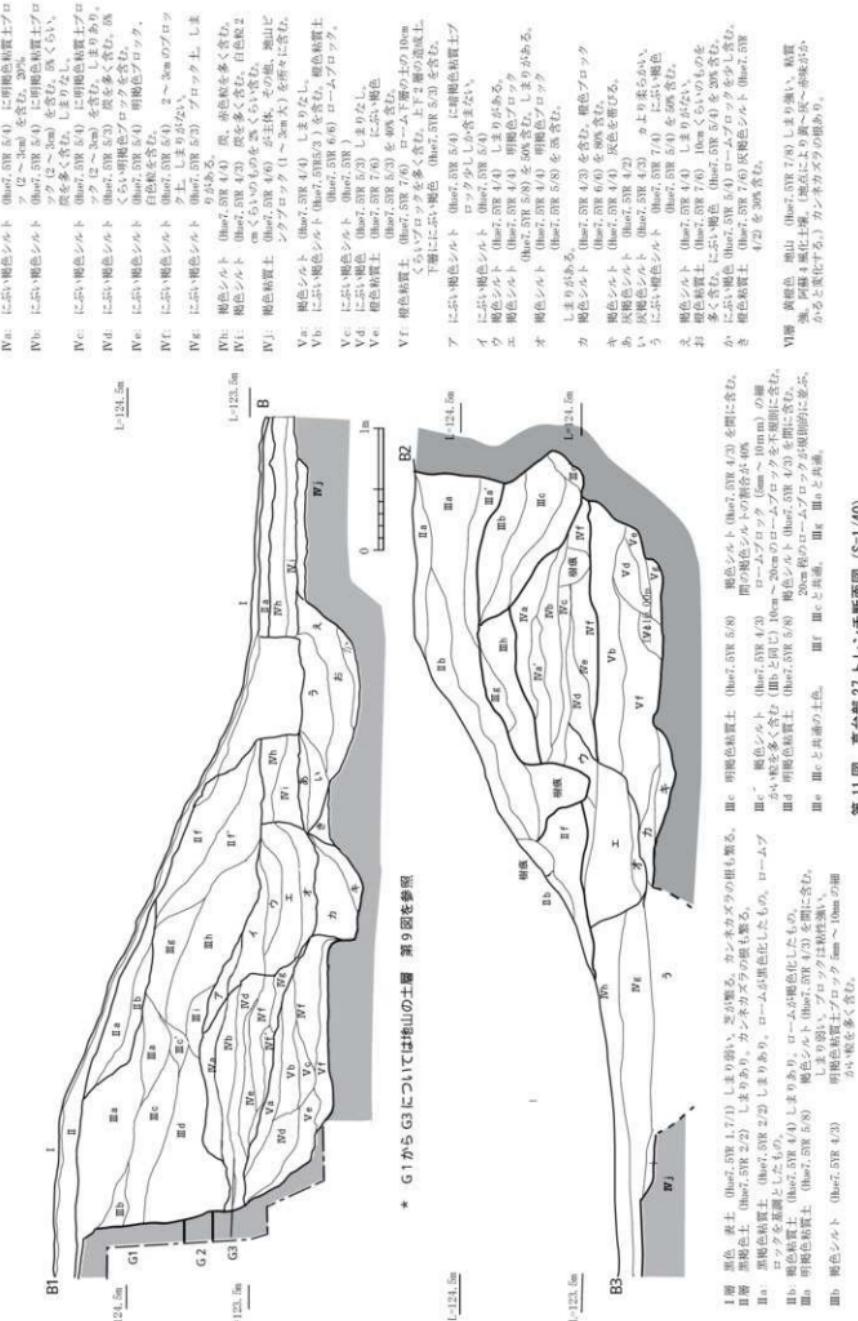
第8図 鞠智城跡高台部遺構配置図 (S=1/200)



第9図 高台部基本土層断面図 (S=1/40)

第10図 高台部土層断面図 (S-1/100)





第11回 高台部27トレンチ断面図 (S=1/40)

ら掘削された土坑の埋土にしまりがないことから、高台斜面や周辺に生えていた樹木等に起因する痕跡と考えられる。

下層は、上層のブロック土と中層の凝灰岩主体の土が混ざった堆積がみられる。

最下層で確認された2つの土坑状の掘り込み（径約0.4m・深さ約0.3m、径約1.5m・深さ約0.45m）は断面により中層からの掘り込みであることが確認できた。埋土にはしまりがない。

[31 レンチ]

高台端部31レンチの深堀調査（幅約0.4m、最深部1.3m）では、地山の上に黒色に近い褐色土（Hue7.5YR4/2）が斜め上部に堆積（厚さ0.1～0.2m、長さ2m）している。その上層に27レンチの中層に対応する土が堆積している。

31レンチの表土以下は27レンチの中層に対応する土が堆積している。その下は、斜面に黒色土が10cm程堆積している。旧表土と考えられる。斜面裾部に2m程の深さ40cmの土坑状の窪みがある。

（地権者への聞き取り）

旧地権者より、昭和40年代に重機を導入してクヌギ林を桑畠に変える大規模な造成工事を実施し、1間（1.8m）程高かった高台の南東部を削り取ったとの証言を得た。確認した溝については、その後メロン等の畑として利用した痕跡ではないかということである。

（高台の遺構と整地の性格）

31レンチの黒色土層が削平されていることから旧地表が削平されていることが判明した。その堆積状況から、出土遺物がないために時代は不明ながらも現状より地形的に高かったと考えられる。

また、27レンチの中・下層とも土にしまりがなく、昭和40年代の整地作業の時かそれ以前の新しい時期の整地作業に伴うものと考えられる。土坑状の掘り込みは、埋土にしまりがないことから、高台斜面や周辺に生えていた樹木等に起因する痕跡と考えられる。

高台で検出された溝は、クヌギ林から桑畠になった後、メロン等の畑として使用された時の耕作痕跡と判断した。

以上のことから、高台部分は元々1.8m程高く、古代の土塁や建物等の遺構が存在した可能性は否定できないが、後世の開墾や造成などにより、当時の遺構は消滅し、地形が改変されていると考えられる。

（3）門跡周辺の調査（第7・12図）

①調査の目的と方法

平成13年の第22次調査により、門跡の柱穴跡1基（方形壙方は1辺82cm、柱復元径約60cm）、比高差1.2mの道路硬化面が確認され、懸門構造であることが判明している。また、この柱穴跡より北東に約3m、高さ約1.7mの高所に1辺約80cmの方形壙方らしいものが1基確認されたが、遺構と断定できないまま保留とされてきた。

今回は、これらの遺構を確認し、唐居敷と柱穴の位置や門の上屋構造の再検討を行うことを目的として、埋め戻された土や土壟を除去し、確認を行った。柱穴跡や道路硬化面が残る土層ベルトなどが脆弱であったため、新たな掘削や削りは行わなかった。

②調査所見

その結果、門跡の柱穴跡1基と比高差1.2mの道路硬化面を平面や断面で確認し、従来の見解どおり、懸門構造であると推定できる。しかし、道路硬化面と柱穴跡がほぼ連続した位置関係にあることから、これらの遺構は同時期ではない可能性が考えられる。

一方、保留とされていた16レンチ東側高台にある方形の壙方らしいもの（第12図参照）は、軟質の凝灰岩で、遺構ではない可能性が高いと思われる。また、四脚門とするには道路硬化面で確認した柱穴跡との位置関係についても並びが合わず、方向や高さを考慮すると非常に困難な状況といえるが、保存整備検討委員会での指導・助言を受け、最終的な結論を出さず検出した状況で埋め戻しを行った。

唐居敷については、1/10スケールでの実測を行い、現地での再検討を行った結果、柱痕跡と軸摺穴の位置関係から、柱痕跡に近い方が城外側、軸摺穴に近い方が城内側であることが判明し、城内と城外の向きが確定した。しかし、元々あった正確な位置については、柱穴が1基しか確認されておらず、登城道もやや屈曲している状況

から特定するには困難である。

以上、確認された遺構から、堀切門は二脚（冠木門）以上の懸門であったといえる。また、凝灰岩を露り切った両側の壁に横木を渡して門自体の安定度を高める構造であった可能性も考えられる。唐居敷は、長軸 355cm、短軸 184cm、厚さ約 20 ~ 50cm を測る巨大な門礎石であることから、四脚門以上であった可能性も否定できない。
(保存措置)

埋め戻しについては、遺構面に花崗岩が山砂状になった真砂土を 20 ~ 30cm 敷き詰めた上に不織布を敷き、土嚢、土の順で埋め戻した。また、土層ベルトを隔てた 16 トレンチと 20 トレンチの一一番低い場所に水抜き用の径 15cm、長さ約 100cm の塩ビ管をそれぞれ 1 本ずつ埋設した。再発掘の際、土嚢袋を除去する時に土圧で遺構面が壊れていたこと、土層ベルトで地下水がたまつた痕跡があったことから、保存整備検討委員会の指導により遺構を保存する応急措置として実施した。

(4) 東側土壘下部の調査（第 7・15・16）

①概要

土壘の外壁側部分の下部調査になる。城壁中段に設定されていた 9 トレンチの延長になる。現況の標高は、107.4 ~ 111.8m 部分である。幅 1.5m、長さ 8.3m の 32 トレンチを設定した。

表土から人力掘削を実施し、南側に先行トレンチを入れながら掘削を実施した。遺物の出土状況と断面の土層状況を見て掘削を実施した。II 層までは近世陶磁器が出土しているため、掘削を実施した。III 層上面に黄褐色粘質土層を検出したが、先行トレンチ内で近世陶磁器が出土したため、掘削を行い、IV 層面まで掘削を実施した。

しかしながら、IV 層に一部樹根痕跡があり、陶磁器はそこから出土したことが判明したため、積土の状況から、II 層以下を積土と判断した。

トレンチの方向が地形と地山の堆積方向から約 45 度ずれている状況が判断できたため、トレンチの幅が 3m しかないことを考え直交方向に 2 菓所土層観察用ベルトを残して掘削を行った。

中段部分は上層の積土が顕著でなかったため、積土の下部の状況を確認するため、調査区の壁及び直交方向土層観察用ベルトに先行トレンチを入れて、土層を確認しながら明確な黄褐色粘質土層まで掘削した。先行トレンチは IX 層まで検出した後、さらに深堀して地山を追いながら掘削を実施した。

②土層堆積

ローマ数字の単位は、黄色（主に黄褐色粘質土層や褐色のシルト層に起因する土）・灰色（凝灰岩に起因する土）をセットに考えた。

i) 柱穴を検出した上位の土層

I 層：表土・及び畑の旧耕作土及び土耕作のために平坦地を造成するためかさ上げした土。凝灰岩を崩した土で、1cm 程度の軽石等を含む。

II 層：I 層とほぼ同様な土であるが、しまりがあり、かさ上げした土と考えられる。黄褐色粘土を含み、土壘を切り崩した土と考えられる。

III 層：上層に 10cm 程度の黄色粘土を多く含む土が見られる。（III a 層）ここからが、土壘の積土と推定できる。III 層下層は、凝灰岩に起因する土である。上層については、灰色が濃く、下層が少し薄く、砂質が強い。

IV 層：黄色の粘質のブロックを含む土で、黄褐色粘質土層に起因する土である。南側の壁を見ると 1.5m の長さで、約 20cm の高さの傾斜はあるが下層に比べて水平である。下層は、凝灰岩に起因する土で、2m の長さで約 60cm の高さの傾斜がある。

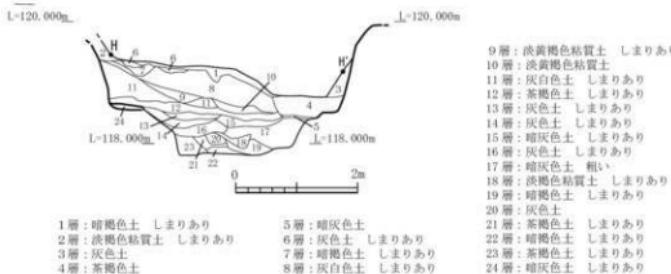
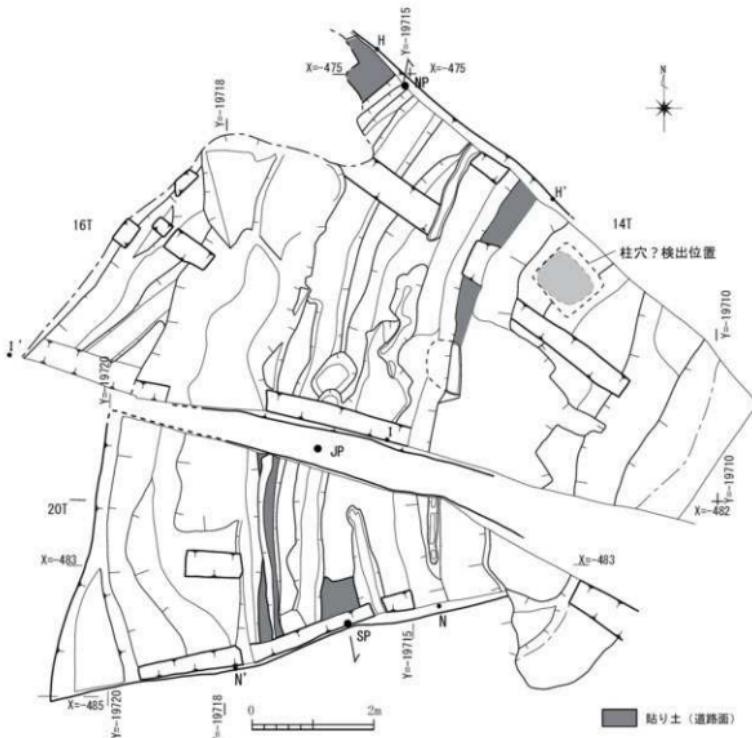
V 層：褐色シルト（黄褐色粘質土層より上層に堆積する土に起因する土；厚さ約 40cm でレンズ状に堆積している。）

VI 層：柱穴の上に堆積した積土と柱穴の埋土の上層に堆積している層である。レンズ状堆積である。凝灰岩を含むが、VI c 層は褐色系の土を含む層で、VI a, VI b 層は、凝灰岩を多く含む層である。

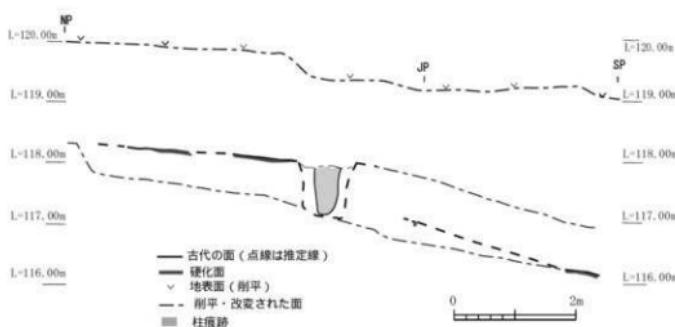
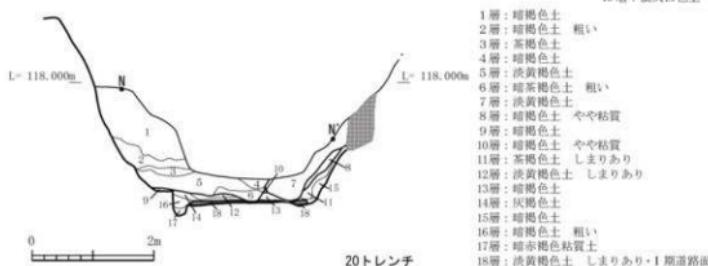
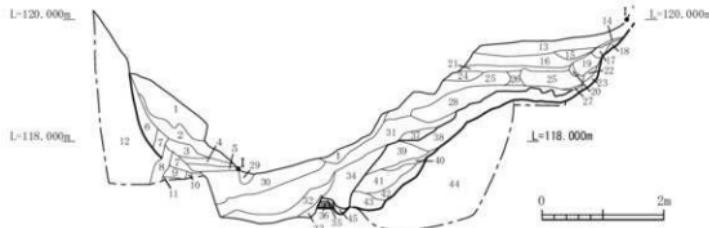
VII 層：10cm 以上の凝灰岩ブロックを含む層である。間層に褐色のシルト層を含む（VII b 層）。黄褐色粘質土より上層のアカホヤ火山灰の 2 次堆積層を含む可能性もある。

VIII 層：基礎盛土とでもいう部分である褐色系の土に、凝灰岩が粗砂状やブロック状に入る。20 ~ 30cm 程の厚さで細分できる。15 度程の傾斜で堆積している。

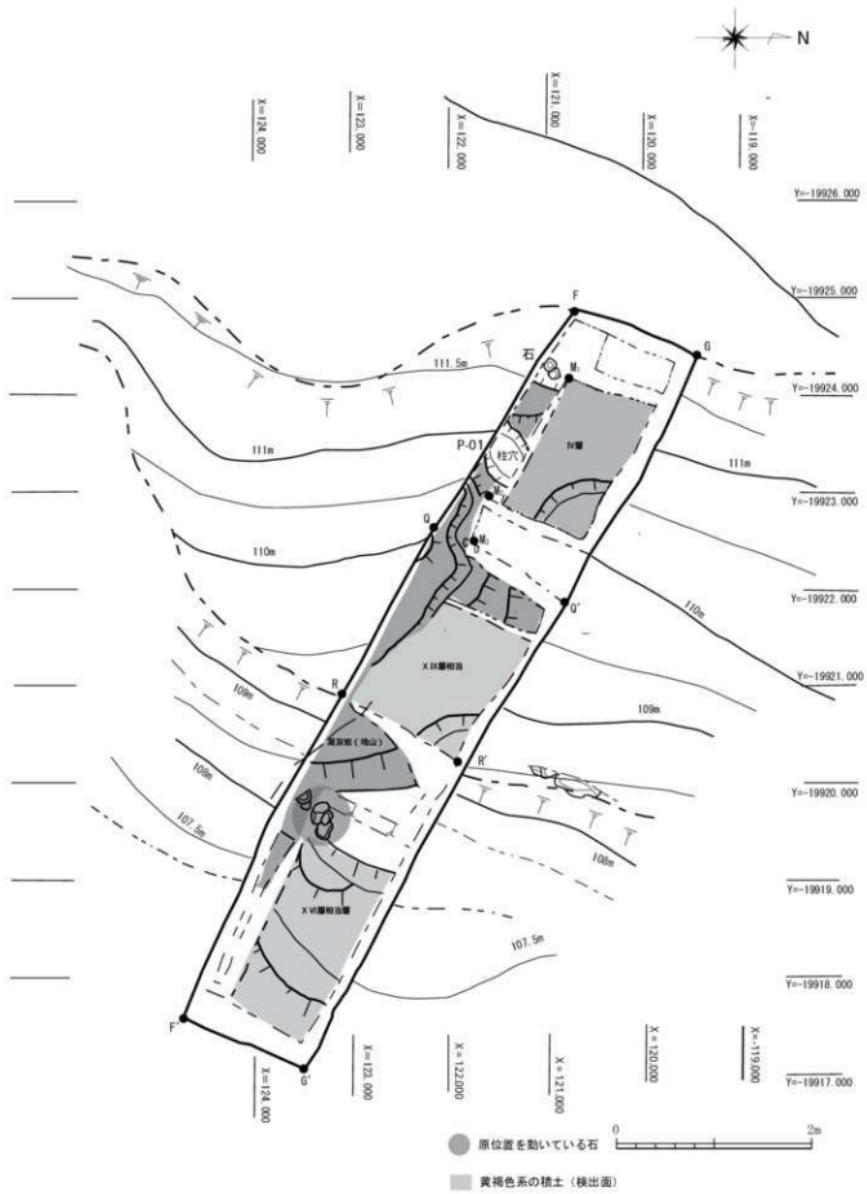
ii) 柱穴を検出した下位の土層



第12図 堀切門跡 14・16・20トレンチ平面図・土層断面図 (S=1/80)



第13図 堀切門跡 14・16・20トレンチ土層断面・見通し断面図 (S=1/80)



第 14 図 城壁下部 32 トレンチ平面図 (S=1/50)



第 15 図 城壁下部 32 レンチ両壁断面図 (S=1/50)

32 ランチ東西断面(A-A', B-B') 図土層注記

主作は絶滅皆の歴れた土、
ロームも混ざる。ロームも混ざる。
褐色シルト、(Blue7, GYR 4/4) $bm < 64$ の褐色岩の最もまさる。



第16図 城壁下部32トレンチ北壁断面図 (S=1/40)

IX 層：褐色粘質層をベースにした堆積である。下層は確認できていない。

XI・XII・XIII 層：黄褐色のシルト層で 1m の範囲で断面にて確認できただけである。凝灰岩の地山が平坦に整形されている上位の積土である。

XIV 層～XV 層：凝灰岩を崩した土を基調とする。水平に積土が行われており、古い積土の可能性がある。

XVI 層～XVII 層：基礎盛土の可能性がある。黄褐色系の粘質土を基調とする。凝灰岩の崩した土が間層に入る状況である。

地山 : 凝灰岩の地山である。軽石層をほとんど含まない軟質の層である。

Ⅲ) 遺構

[互層積土]

検出した積土の標高は 106 ~ 110.8 m である。上部の南側の先行トレーニングで検出した。基礎盛土の他、積土を確認した。土壌構造は、凝灰岩の壁に黄色の粘土と凝灰岩由来の土を交互にうまく積んでいる構である。(検出した層位参照)

[柱穴]

凝灰岩の基盤層で柱穴状の遺構を確認した。埋土が VII 層・VIII 層と類似する。上場(上面)幅約 70cm 深くなるにつれて幅は狭くなっている。深さ 60cm の時に幅 35cm 程になっている。深さ 60cm 程で埋土に褐色シルトが検出されている。完掘はしていない。

第3節 調査のまとめ

(1) 高台の調査(第 7 ~ 11 図)

堆積状況からの高台部分の整地状況について、27 トレーニングの上層は、基本的に黄褐色粘質土のこぶし大以上の土を含むことから、聞き取り調査をした時の昭和 40 年代の高台の整地の作業に伴うものと推定できる。

中位の堆積以下は、凝灰岩に起因する土を含み、互層堆積であることから、上層の土の堆積とは異なる。昭和 40 年代以前の整地の可能性がある。北東から南西にかけて 10 ~ 15cm 傾斜することから、当初の尾根筋が西側に屈曲していた可能性や、樹木による擾乱を埋めているための傾斜の可能性がある。

下位の堆積は、現況で低い部分より地山部分が下がっていることから窪みに入れた整地である。

土坑状に掘り込まれた土にしまりがないことから、高台斜面に生えていた樹や樹痕等を取り去る抜根の際の穴等の痕跡と推定できよう。

黄褐色粘質土層より上は、新しい段階の整地層、高台斜面の整形は肩部に古い斜面堆積が見られないことから、高台を整地した新しい段階の整形と考えるのが妥当と判断した。

つまり、樹木の痕跡を埋めた後に、新しい時期に凝灰岩を大部分起因とする土と黄褐色粘質土層を含む土を交互に 15cm 程度の厚さで整地層として埋めて、上層はさらに間に荒く埋めて、さらに新しい段階として上層の新しい段階の樹を取り去り、埋めたのではないか。時期的にも 2 時期 3 段階の工程で埋められたのではないかと考えられる。

また、高台の用途については、聞き取り調査により南東側が約 1 間(約 1.8m) 高かったということだが、30 トレーニングの斜面の 1 層部分の堆積が高台の黄褐色粘質土層に起因するならば、東部にさらに土壘状の高まりがあった可能性がある。現況でも高台の東側が約 40cm 高い。故意に高まりを残して、削られているとはいえ、周辺地形より高いことから、高台が土壘の一部であったと推定できる。

(2) 城門周辺の調査(第 7・12・13 図)

14 トレーニングで検出した柱穴は埋土だけでなく、硬化面対応面で検出した柱穴(16 トレーニング)との位置関係についても並びが合わず、四脚門等の柱穴としては、方位から考えて困難な状況である。埋土からも人為的なものが不明である。

そのため、今回は整備検討委員会の先生方にも相談して、将来に期することとして、検出した状況で埋め戻しを行った。

唐届敷の位置については、柱穴が 1 基しか残存せず、登城道がやや屈曲している状況から特定するのはやはり困難な状況であることが再確認された。懸門構造については、柱穴検出面上層と下部の道路面にかけてのベルトが残存していないため、検証は困難であるが、硬化面が残存することや、掘削横断面から見て、従来の見解どおり、懸門構造である可能性が高い。

(3) 土壁下部の調査 (第 7・14 ~ 16・18 ~ 23 図)

城壁の東側の平坦部の標高が 120 m であるので、今回検出した積土の最も下部は、105.3 m であるので城壁の高さは、少なくとも 14.7 m 以上はあるということが判明した。

基礎盛土の可能性がある部分の他、積土を確認。土壁構造は、凝灰岩の壁に黄色の粘土と凝灰岩由来の土を交互にうまく積んでいる構造を基本としている。

築造方法については、今回確認したトレーンチ内の積土には何種類かがある。何回かの大きな作業工程が考えられる。以下に記しておく。

第 1 段階 基礎部分の積土は黄色系の土で粘性が強く、凝灰岩の割合が少ない。トレーンチの方向が地形に沿ってないでの断定はできないが水平に丁寧に積んでいる。(XVI 層より下)

第 2 段階 黄褐色粘質土の厚層は薄く、凝灰岩の割合が多い段階。細い凝灰岩を厚めに入れている上位から中位は、積土が緩やかな傾斜を持つ(VII 層・VIII 層)。下位は凝灰岩の 10cm 以上のブロックを含む。積土はやや雜。

第 3 段階 検出した柱穴より上で上層は褐色系の土で、黄褐色粘質土層より上層の土を含むと考えられる土を途中に含む。積土はレンズ状の堆積で、平坦に積もうとする段階。凝灰岩をブロック状に含み緩やかな傾斜を持つ。(V ・ VI 層)

第 4 段階 上層部分は、黄色系の 5 ~ 10cm の厚さの粘質系の土と凝灰岩に起因する土を規則的に積む。9 トレーンチまで続く積土である。全体的には、深迫門等の版築状の積土よりは傾斜もあり、一つ一つの堆積も厚く丁寧でない。標高や崖面の状況から考えて、凝灰岩に起因する土が割合としては大半である。(III 層より上)

9 トレーンチの堆積状況から II 層も積土の可能性が高い。

また、築造方法については、凝灰岩の基盤層で柱穴状の遺構を確認した。上場(上面)幅約 70cm 深くなるにつれて幅は狭くなっている、深さ 60cm の時に幅 35cm 程になっている。完掘はしていないが、柱穴の深さは 70cm 以上と考えられる。柱痕跡の確認は困難であった。埋土が VII 層と類似することから、積土の 2 段階の地盤に伴う遺構と考えられる。

断面において、この柱穴の前後では明確な積土のズレ等は見られないが、上層の VI 層がレンズ状堆積になっており、柱穴周辺で土が落ち込んでいる状況等から、積土を埋き止めて押さえる檻板を止める柱穴等の用途の可能性があると考えられる。

第 1 段階の盛土は丁寧だが、中間の積土は凝灰岩を利用した厚さが 60cm 以上の箇所があり、やや省略した積土になっている。積土の傾斜角度は小さいとはいえない。IV 層より上は傾斜がやや少ない積土が施されている。

第 4 節 今後の課題

(1) 城壁の規模

今回の調査で城壁の高さが 14.7 m、約 15 m の規模以上ということが判明した。

堀切集落から旧城北小学校までの通路を作るための掘削のため、城壁の裾部が壊されていることは、4 トレーンチで確認していたが、今回の城壁裾に設定した 32 トレーンチで、基礎盛土の可能性がある丁寧な積土を検出できた。ただし、地山の傾斜軸から 45 度掘れているとはいえ、積土の幅は約 70cm しか検出できていない。

今見られる積土の傾斜角度は、後世に削られたものと考えるのが自然であり、隣接した 22 トレーンチで登城道を確認し、4 トレーンチも確認している調査員も同様な見解であった。

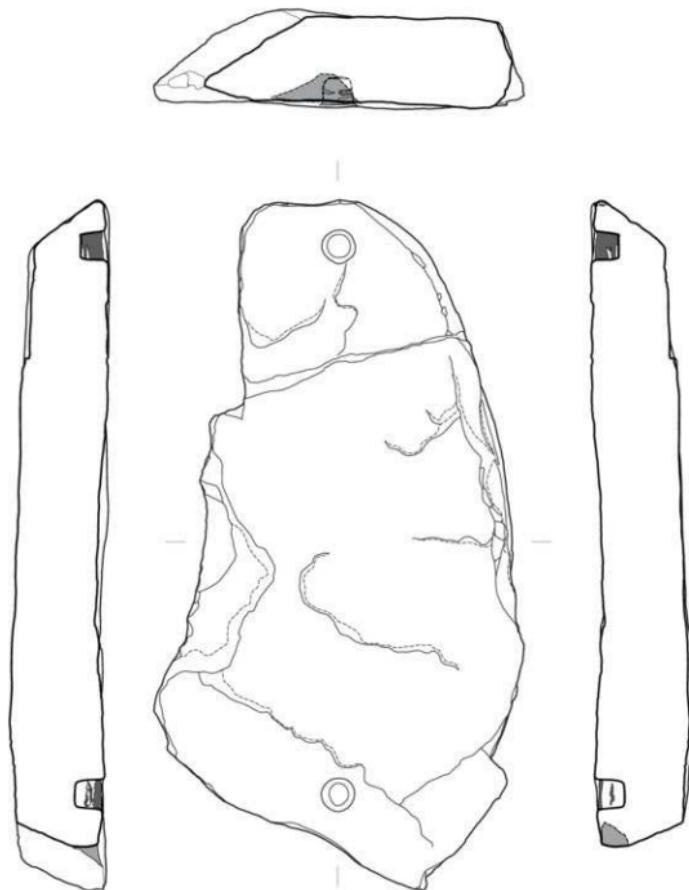
今後どの範囲・どの高さまで積土があるのかを確認するのは困難な面があるが、4C トレーンチ下層の調査や 32 トレーンチの延長により、全容はわからないまでも、もう少し基礎盛土の構造や城壁の規模の解明が可能であると思われる。

また、城壁中段から上段に設定された 17 トレーンチには聖痕跡が見つかっているが、下部に古い斜面堆積が見つかっていない。後世の道路掘削に伴う痕跡の可能性もあると考えられる。

下部の城壁の積土状況や岩盤の脆弱な状況から、古代の時期に城壁の上部について凝灰岩が露出していたかは再考する必要があると考えられる。

(2) 登城道

登城道については 22 トレーンチでの検出により標高 105 m 付近まで確認されている。現状では、隧道が掘られ、堀切集落への道が続いているが、凝灰岩の西側城壁の裾を通っていた窪地が見受けられる。どこまで古代の道路の形状が残存しているか不明であるが、現状での詳細な測量やトレーンチでの確認が必要と考えられる。



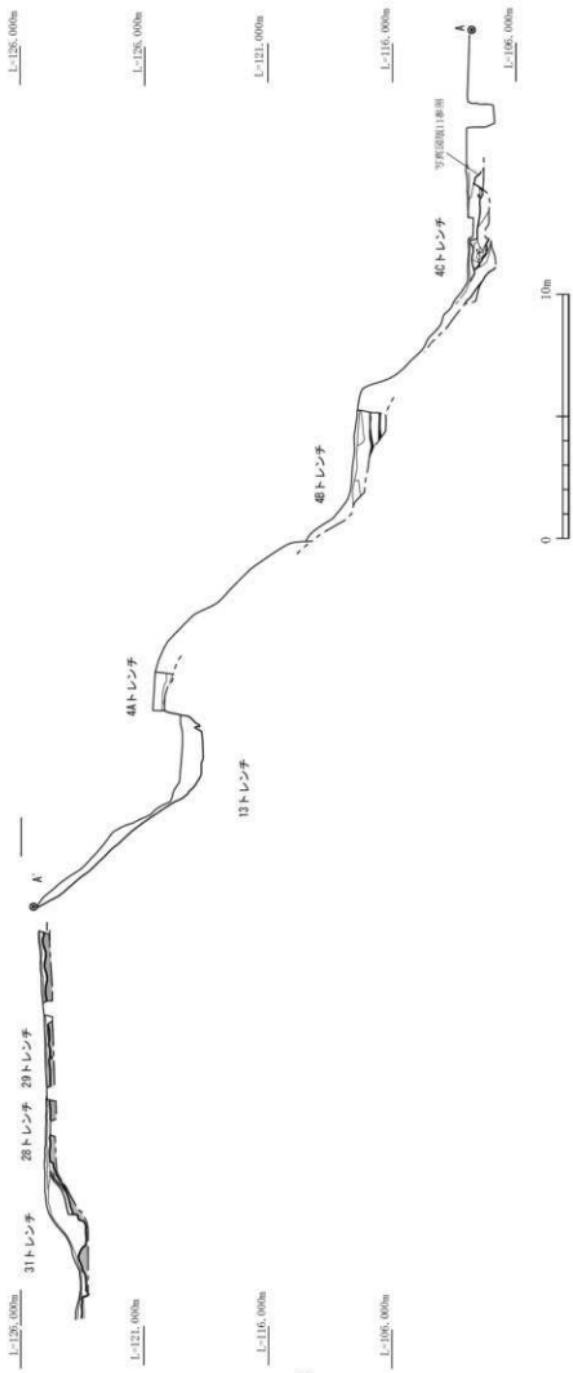
軸摺穴内銹付着痕跡

摩擦痕跡

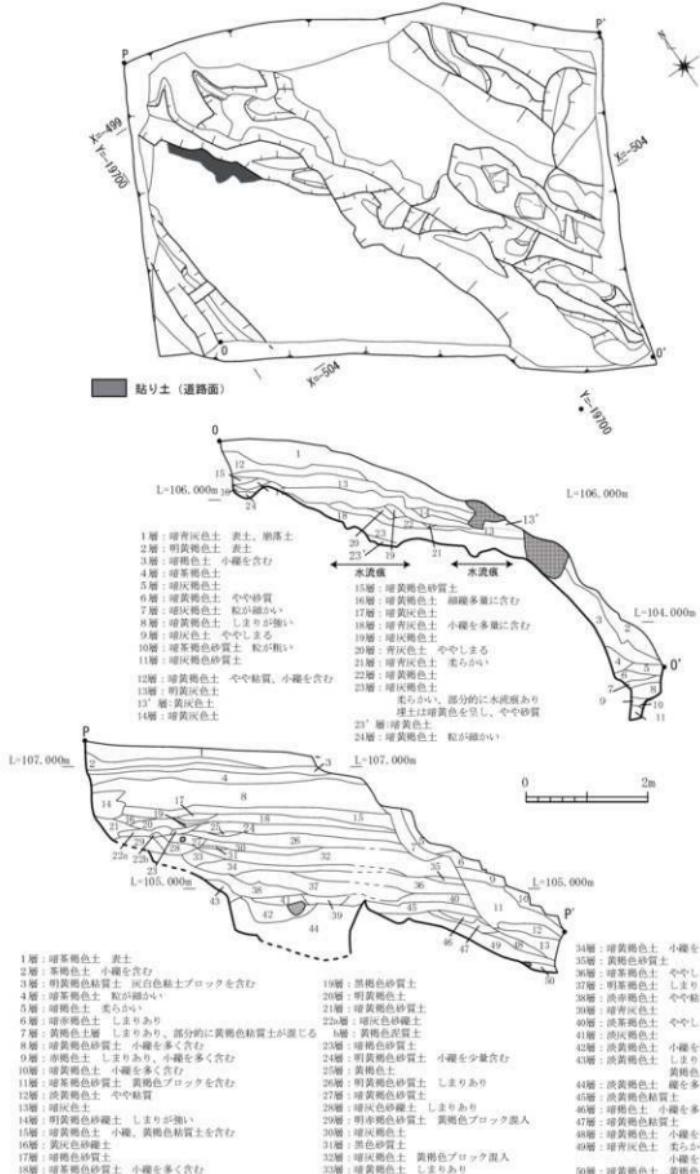
第17図 石製唐居敷実測図 (S=1/25)



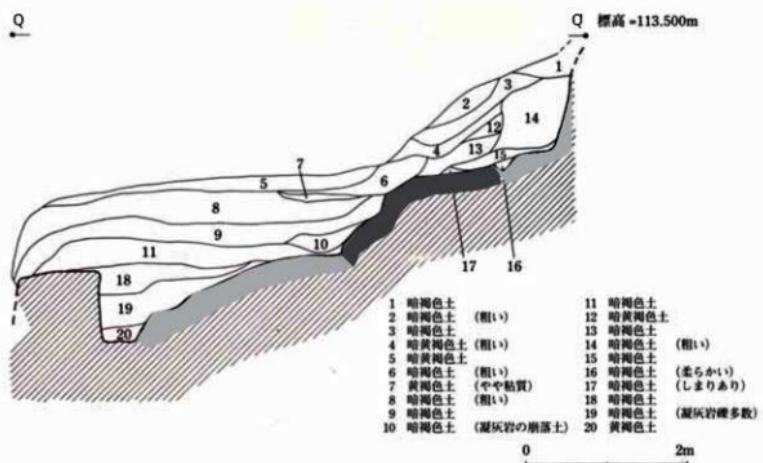
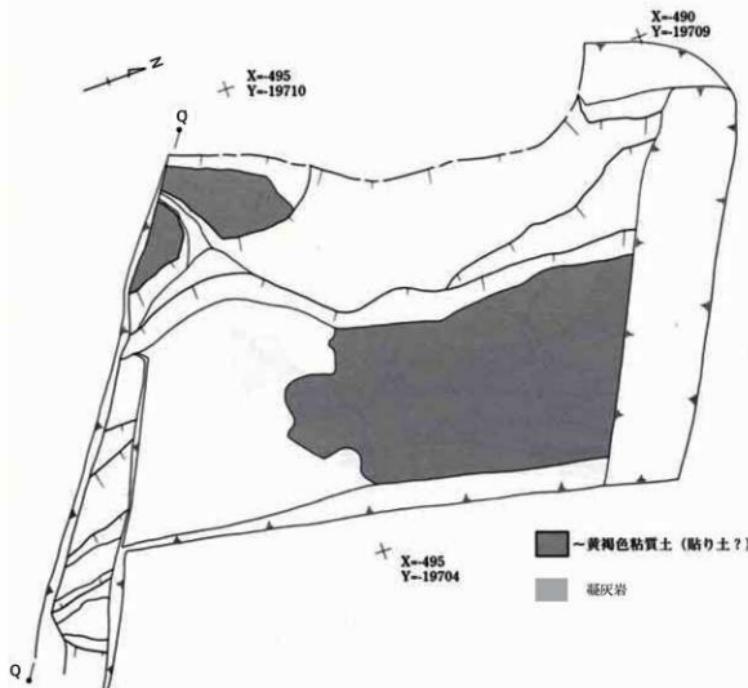
0 1m



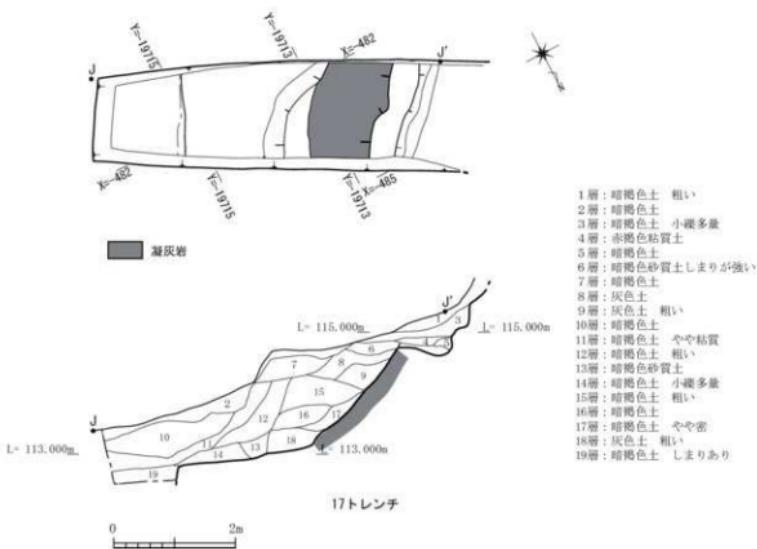
第18図 縱切門跡 高台トレンチから4トレンチ土層断面図(1/200)



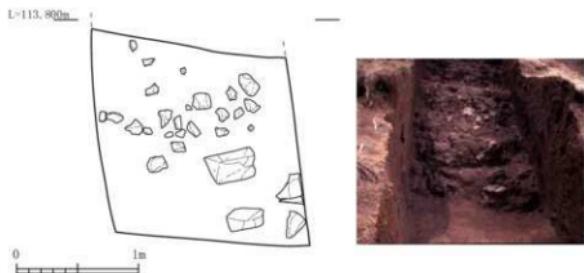
第19図 堀切門路 22トレンチ平面図・土層断面図 ($S=1/80$)



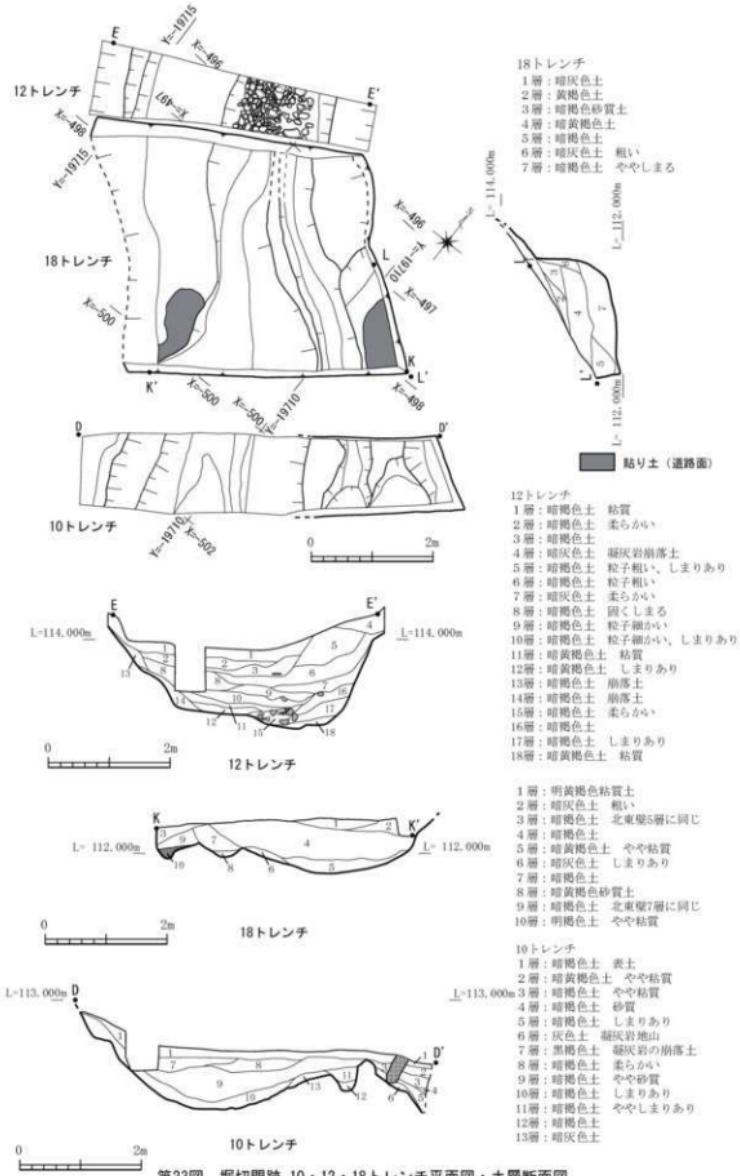
第 20 図 15 トレンチ実測図 (S=1/60)



第21図 堀切門跡 17トレンチ平面図・土層断面図(1/80)



第22図 堀切門跡 17トレンチ城壁加工痕模式図(1/40)



(3) 堀切門内側の土壘の形状

段々畝により、土壘が削平され、土壘の形状が不明である。周辺の測量により、残存する可能性がある部分を見つけ出し、測量やとトレンチ調査により、堀切門に取り付く土壘構造を少しづつ解明する必要がある。

(4) 門構造

唐居敷があった位置を確認するため、16トレンチを再び開けて検討したが、硬化面と柱穴1基のみが古代の城門跡痕跡である。正確な唐居敷の位置を特定できなかった。唐居敷の位置は、他の遺跡の事例の検討や周辺の状況を検討して考える必要がある。上部構造についても、掘立柱の主柱穴の門で唐居敷から門扉が9尺から9尺半の構造とまでしか判明していない。南側に位置する門、懸門構造。唐居敷の規模。場外から門構造が見えにくい構造等様々な面から他の古代の城門を参考に詳細な検討が必要と考えられる。

(5) 保護・保存のために

今回堀切門に新たなトレンチを設定して調査を行ったが、地山の凝灰岩の熔結度は弱く、脆弱である。登城道内側の壁の崩落も状況から見て、今後保護する必要がある。今後整備している中で、古代の景観を残し、見学していくだけくという面と保護するという面で整備の方針を検討する必要があると考えられる。



第21次調査堀切門跡全景（南から）

新智城跡第33・34次発掘調査(鉢切門跡)出土遺物観察表

図版 番号	遺物 番号	種別	器種	出土地點	層位	寸法(Gm)	底径	器高	(内面)	(外面)	調査	胎土	焼成	残存状況	備考	
色調	(内面)	(外面)														
1 須惠器	不明	20Tr下	表探	—	(3.1)	—	0.9	直心円当	平行タキ	輝石	良	破片	裏の觸感か?			
2 土師器	不明	25Tr削	表探	—	(3.8)	—	1.0	ナデ?	不明	Hue(OYR)/ 4:「こぶし」黄 褐色	Hue2.5YR8/8 石英、輝 石多し	やや不良	破片	表面の器面調整不明		
3 龍泉窯 系青磁	楕	27Tr下平面	表土	—	(2.3)	—	0.4	片断り、 施釉	回転ナデ後 一部施釉	Hue10YR8/ 灰色	Hue10YR8/ 灰色	良	口縁部破 片	運并文の一部が僅か に残存、施Ⅱ類((13世 紀前後～前半)		
4 陶器	皿	32Tr上段	3層下 (1.3m下)	—	(1.8)	—	0.3	回転ナデ後 一部施釉	回転ナデ後 一部施釉	Hue2.5Y5.1/ オリーブ灰 色と Hue10BG5/ 1:青灰色	Hue2.5Y6.4: 「こぶし」黃 色と 2:灰黃色	良	口縁部破 片	内野山窯: 17世紀後半 (内面・綠青色釉)		
5 土師器	甕	32Tr上段	搅混土 (約30cm 下)	—	(2.9)	—	0.8	回転ナデ	回転ナデ	Hue10YR8/ 3:「こぶし」黃 色	Hue10YR7/3 石英、カク セン石、 輝石	良	口縁部破 片			
6 陶器	皿?	32Tr上段	搅混土 (約30cm 下)	—	(1.7)	—	0.3	回転ナデ 後施釉	回転ナデ後 施釉	Hue5YR6.2: 反オーリーブ 色	Hue5YR6.2: 長 石	良	体部破片	唐津系?二重口縁		
7 磁器	楕	32Tr上段	表土	—	(2.5)	—	0.3	回転ナデ 後施釉	回転ナデ 須絵付け 後施釉	Hue7.5GY8.1/ 1:明綠灰色	Hue7.5GY8.1/ 1:明綠灰色	良	口縁部破 片	肥前系磁器 19世紀後 半～19世紀前半		
8 磁器	佛利?	32Tr上段	腐土中	—	(2.3)	—	0.5	回転ナデ 後施釉	回転ナデ後 一部施釉	Hue10BG6/1 青灰色と Hue5G4/1暗 緑灰色	Hue10Y/ 8.1:灰白色	—	良	体部破片	肥前系磁器	
9 磁器	佛利	32Tr下段	3a層 (0.9m下)	(8.0)	(2.9)	1.1	0.7	回転ナデ 後施釉	回転ナデ	HueN7/:灰 白色	HueN7/:灰 黑色前多	良	底部破片	肥前系磁器		

× Tr はトレンチの略

第4章 考察

門周辺の地形

鞠智城跡における城門跡は、これまでに唐居敷の存在から堀切門をはじめ、深迫門、池ノ尾門の3ヶ所で確認されている。今回報告をする堀切門跡は、城域の南中央に位置し、東西に延びる舌状丘陵から南東方向に開口する谷地形である。門の推定位置は、谷地形の基部に近い奥まった地点に認められる。

門跡周辺は、古くから菊池市堀切と山鹿市菊鹿町米原とを結ぶ道路が通っており、20次調査（1998年度）の以前から3つのルートが確認できている。谷筋に2つあり、一つは谷の西側際に沿って堀切状地形の底を通る道で、もう一つは谷の中央を九十九折れ状に通る道である。後者の道によって城壁を一部壊している箇所は後世の掘削である。唐居敷が検出されたのは前者の道上である。これらの道のほかに丘陵の尾根筋に南北方向から延びる道もあった。また、当該地点周辺には比較的広い平坦面が2面認められる。一つは谷の基部に位置し、東西に延びる平坦面で、もう一つは堀切状地形の西側壁の上段に位置する。

登城道と城門構造（第11・12・19・23図）

登城道は阿蘇熔結凝灰岩の崖地の南西側を掘り切って設けている。登城道の路面幅は1.8～2.7mを測り、路面を粘質土によって整形し、両・片脇に側溝を有する。傾斜角は約20°を測り、下方に枠形状のクランクを伴う。唐居敷は花崗岩製で、表面に径15～20cm、深さ14～15cm程の軸摺穴を有する。堀切門で検出された唐居敷のみ両縁辺部に円形の刺込みを持ち、一石に芯々で2.8m間隔の2つの軸摺穴を設けた特異な形態をなす。唐居敷は原位置から動いた状態で確認されているが、堀切門のみ門幅を特定できる。

城門構造については、唐居敷を除けば門の支柱穴と考えられる柱摺方1基が検出されており（16トレンチ）、具体的な構造を言及できるまでには至っていないが、以前、冠木門的な門構造として想定した経緯がある。現在、堀切門の門構造を考える手がかりは、2つの軸摺穴と唐居敷の左右両縁辺に認められる円形の刺込み、それから支柱穴1基のみである。14トレンチで確認された90×70cmを測る隅丸方形の柱摺方にについては、城門構造と直接的に関係するかは判断しない。また、16トレンチから門の支柱と考えられる一辺82cm、深さ96cmを測る方形の摺方、及び復元径約60cmの柱痕跡を確認している。城門構造、規格を類推することは難しいが、硬化面の残存や摺削断面の観察から懸門構造であると想定される。唐居敷の軸摺穴の芯々間は2.8mであることから、門扉の規格は1.4mであることがわかる。また、唐居敷の左右両縁辺に認められる円形の刺込みまでの距離が3.2m、支柱穴の直径が60cmであることから、門柱の芯々間は3.5mと想定される。現在、堀切門跡で確認されている城門構造は、唐居敷・掘立柱の構造である。大宰府都城や大野城の研究成果では唐居敷使用掘立柱門（Ⅰ期）から礎石建柱門（Ⅱ期）へと変遷することが知られており、その時期は8世紀第1四半期に比定される。鞠智城跡は10世紀第3四半期まで存続したことが分かっており、長者原地区の建物遺構の礎石建への移行も大宰府都城、大野城と大きく時期差がないことを考慮するならば堀切門の唐居敷・掘立柱城門はⅠ期に位置づけられる可能性がある（小田2012）。そうであるならば、緒治期を含め、門の建て直しや修復が行われていた可能性は高い。このことを裏付けるように、支柱穴の際まで硬化面が及ぶことから、少なくとも2時期以上の城門構造が存在したと考えられる。また、現在確認されている支柱穴の外側に柱構造を持つ城門があった可能性も考えられよう。柱穴の前面に1mを超す平坦面が残存していることから、懸門構造でなかった時期も存在する可能性が考えられる。大野城原地区城門跡Ⅱ期における軸摺穴の芯々間2.7mと近似値を示すが、門柱の芯々間ではⅠ期の3.6mや金田城南門の3.2mと近い数値を示す。

大野城北石垣門は門と登城道との比高差が1.4m、屋島城では北門等の3つの門が通路床面と1.7～2.3mの段差を持つ構造である。また、これらの山城では、土壁と直交する形で城門が造られており堀切門と異なる。堀切門は凝灰岩の壁を掘削して斜めに登城道が造成され、現状の土壁の状況から考えると城壁の下からはあまり見えない門構造の可能性が高い。また、大野城の北石垣城門は、大宰府口城門等に比べて主要な城門とは言い難い。屋島城は南西側に設けられた主要な門に懸門構造が採用されている。鞠智城の南側を官道（車路）が通り、うてな遺跡や西寺遺跡、十蓮寺跡などが、また、西側に御宇田遺跡などの官衙や集落が所在する（第3図）ことと、懸門構造の比高差も1.2～1.3mとそれ程高くないことも併せて、正門である堀切門に懸門構造が採用されたことの意義を考える必要があろう。

このような点を念頭に置きながら、他の古代山城との比較を行うことで城門構造の解明に繋げたい。

高台部と外郭線（第7～11図）

堀切門の北西側に位置し、門周辺で最も高い。土壁が門の左右にどのように取りつくのか、あるいは、門を見下ろす高台に何らかの施設が存在したのかの2点について検討するため24～31トレンチを設定して調査を行った。その

結果、26, 27 トレンチの中間（30Tr）での掘削において、上位層に下位に存在する黄褐色粘質土をこぶし大以上の大きさで含む状況が確認された。このことは、当該高台部分の旧地権者から聞き取った結果と合致するものであり、昭和40年代に行われた整地作業に伴うものであろう。中位層以下については、阿蘇熔結凝灰岩に起因する土を含み、互層に堆積していることから上位層の堆積とは異なるものと考えられ、昭和40年代以前の整地である可能性がある。北東から南西にかけて 10 ~ 15cm 傾斜していることから、当初の尾根筋が西側に屈曲していた可能性が指摘できよう。下位では土坑状の掘り込みを確認した。覆土は灰褐色～橙色を呈するシルト質でしまりがない。これらのことから、黄褐色粘質土層より上については、新しい段階に整地された痕跡を示すものと理解されよう。

また、31 トレンチにおいて旧地表面の黒色土層が削平されている状況が確認されたことから、当該地点が既に削平を受けて地形が改変されており遺構面が残存していないことが判明した。高台斜面部についても肩部に古い土層堆積が見られないことから、高台を整地した段階の掘削と考えるのが妥当であろう。

また、高台については、聞き取り調査により南東側が約1間（約1.8m）高かったとの証言があり、26, 27 トレンチの中間（30 トレンチ）での1層が高台で確認された黄褐色粘質土と同質であるならば、東部分はさらに高かった可能性が指摘できよう。また、現況で見る限り当該地周辺には、一段高い高台部を含め東西に延びる平坦面と、堀切状地形の西側壁の上段に位置する平坦面が存在する。前者の高台部については 33, 34 次調査を行ったところであり、後者については 20 次調査（7 トレンチ）で調査を行っている。16 トレンチ付近に推定される城門位置から外郭線を推定するならば、東側では登城道に沿って延びる城壁が谷地形の基部を巡り深追門方向に延びている。城門の西側では高台部南隅から南西方向に巡ると予想される。その際、登城道を見下ろす位置にある堀切状地形の西側壁上段の平坦面が城内に取り込まれるのか、あるいは城外に位置するのか判然としない。登城道西側の城壁との比高差は 8m、傾斜角は現況で 54° である。同平坦面から北に位置する高台部南隅から南西方向に巡る平坦面との比高差は約 3 ~ 4m と小さい。かつて 20 次調査において 7 トレンチを設定し調査がなされたが、遺構は確認されていない。鞠智城跡の南側土塁線や西側土塁線では周縁を巡るよう確認されていることから、登城道を見下ろす位置にある堀切状地形の西側壁上段の平坦面縁端を巡る可能性も考えられるが、現状ではその痕跡を見出すことはできない。

城壁下段部（第 14 ~ 16 図）

城壁は、中段にテラス部を設けた 2 段構造である。20 次調査 4A ~ C トレンチで確認された城壁の断面は、最下段から城壁中段のテラスまでは約 45° の傾斜で立ち上がり、中段のテラスからは約 40° の傾斜で最上段の平坦面に至る。中段のテラスからは、灰土の間層を挟んだ層厚 10cm 程度の黄褐色粘質土層を 3 層検出している。また、9 トレンチ北壁からも同様な黄褐色粘質土層を確認しており、階段状に切土した岩盤に面をあわせて黄褐色粘質土が取り付く状況は土塁の内托構造に似ていて、版築による盛土である可能性が指摘されている。

今回、34 次調査において 9 トレンチの南東側に設定した 32 トレンチで検出した積土の最下部が 105.3m であるので城壁最上段との比高差は 14.7m 以上あることが判明した。また、基礎盛土と考えられる丁寧な互層堆積を確認した。城壁は、阿蘇熔結凝灰岩の壁に黄褐色粘質土と阿蘇熔結凝灰岩に起因する黒灰色～暗灰色砂質土を交互に積み重ねて構築している。大宰府口東方土塁地区（第 30 次調査）における土塁横断土層の地山の形状をみると、地山を 60 ~ 80cm の高さで階段状に整形して版築を行っている。版築は、ほぼ水平に近いが、上部は U 字状に窪んだ状況で積まれている。これは、今回調査した 32T の柱穴より上部の堆積に類似する。

32 トレンチにおいて確認した築造方法、作業工程については、以下のとおりである。

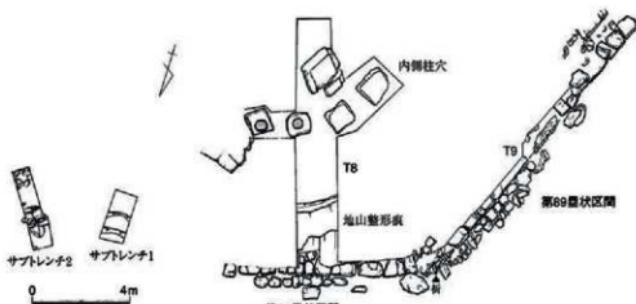
第 1 段階 基礎部分の積土は黄色系の土で粘性が強く、凝灰岩より割合が多い。比較的水平に、丁寧に積んでいる。
(XVI 層より下)

第 2 段階 黄褐色粘質土は薄く、阿蘇熔結凝灰岩塊の割合が多い。細い阿蘇熔結凝灰岩塊を厚めに入れている。積土は緩やかな傾斜を持つ（VII 層・VIII 層）。阿蘇熔結凝灰岩の 10cm 以上の塊を含む。積土はやや雜。

第 3 段階 検出した柱穴より上で上層は褐色系の土で、黄褐色粘質土層より上層の土を含んだ土を含む。積土はレンズ状、もしくは緩やかな傾斜がある。阿蘇熔結凝灰岩塊の緩やかな傾斜を持つ。（V・VI 層）

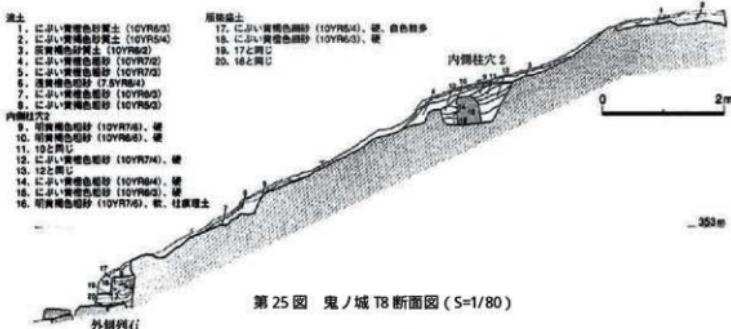
第 4 段階 上層部分は、5 ~ 10cm の厚さで黄褐色粘質土と阿蘇熔結凝灰岩に起因する土を規則的に積む。9 トレンチに連続する積土である。深追門跡の版築よりも傾斜もあり丁寧ではない。標高や崖面の状況から考えて、阿蘇熔結凝灰岩に起因する土が大半を占める。（IV 層より上）

また、築造方法については、基盤層である阿蘇熔結凝灰岩に掘り込まれた柱穴状の遺構を確認した。上面幅約 70cm 深くなるにつれて幅は狭くなってしまい、深さ 60cm の時に幅 35cm 程になっている。完掘はしていないが、柱穴の深さは 70cm 以上と考えられる。柱痕跡の確認は困難であった。埋土が VII 層と類似することから、積土の 2 段階の地盤に伴

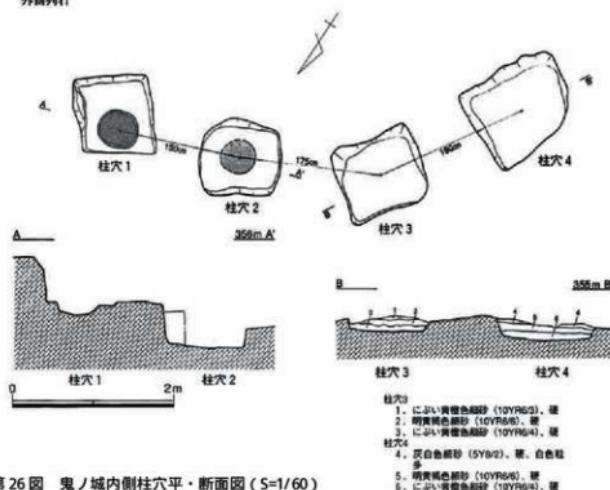


第24図 鬼ノ城T8・T9平面図 (S=1/200)

-357m

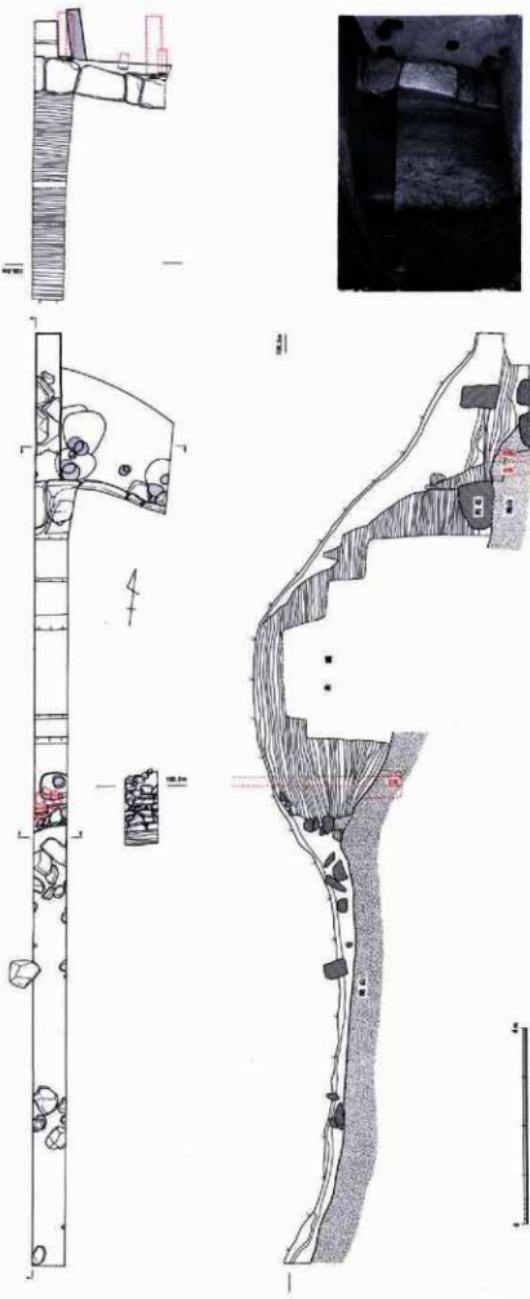


第25図 鬼ノ城T8断面図 (S=1/80)



第26図 鬼ノ城内側柱穴平・断面図 (S=1/60)

(岡山県総社市教育委員会 2005『古代山城 鬼ノ城』総社市埋蔵文化財調査報告 18より引用)



第27図 御所ヶ谷神籠石とトレンチ平面・断面図 (1/100)
(行橋市教育委員会 1998『史跡 御所ヶ谷神籠石』行橋市文化財調査報告第26集より引用)

う遺構と考えられる。断面でこの柱穴の前後で明確に積土のズレ等みられないが、上層のVI層がレンズ状堆積になつてあり、柱穴周辺で土が落ち込んでいる状況等から、積土を覆き止めて押さえる堰板を止めるための柱痕跡の可能性が考えられる。基礎盛土は丁寧になされているが、中間層の積土は阿蘇熔結凝灰岩に起因する土を基調として、厚さが60cm以上の箇所も認められ、やや省略した積土になっている。IV層より上は傾斜がやや少ない積土が施される。版築基底部の柱穴については、御所ヶ谷神龍石における1994年度調査A2トレンチでは列石前面の柱穴だけでなく、斜面の上位部分の版築内に柱穴を検出している。また、鬼ノ城跡T8トレンチにおける列石内側の柱穴等が類似の遺構であると考えられる。

[参考・引用文献]

- 小田富士雄 2012「第V章 各論 第1節鞠智城の創建をめぐる検討」『鞠智城跡Ⅱ』熊本県教育委員会
- 小澤 佳恵 2013「古代山城出土唐居敷から見た鞠智城跡の位置づけ」『鞠智城と古代社会』第2号 熊本県教育委員会
- 小澤 佳恵 2016「日韓の古代山城出土軸摺金具」『季刊 考古学』第136号 特集西日本の「天智紀」山城 - a 雄山閣
- 平井 典子 2016「鬼城山（鬼ノ城）」『季刊 考古学』第136号 特集西日本の「天智紀」山城 - a 雄山閣
- 龜田 修一 2016「神龍石系山城と朝鮮半島の山城」『季刊 考古学』第136号 特集西日本の「天智紀」山城 - a 雄山閣
- 車 勇杰 2016「韓国山城の懸門構造」『季刊 考古学』第136号 特集西日本の「天智紀」山城 - a 雄山閣
- 向井 一雄 2016「西日本山城の城門構造」『季刊 考古学』第136号 特集西日本の「天智紀」山城 - a 雄山閣
- 渡邉 誠 2016「屋嶋城」『季刊 考古学』第136号 特集西日本の「天智紀」山城 - a 雄山閣
- 田中 淳也 2016「金田城」『季刊 考古学』第136号 特集西日本の「天智紀」山城 - a 雄山閣
- 下原 幸裕 2016「大野城」『季刊 考古学』第136号 特集西日本の「天智紀」山城 - a 雄山閣
- 総社市教育委員会 2005『古代山城 鬼ノ城』総社市埋蔵文化財発掘調査報告18
- 考古学研究会岡山例会委員会編 2004『シンポジウム記録4 激動の七世紀と古代山城・吉備の鉄』考古学研究会
- 美津島町教育委員会 2000『金田城跡』美津島町文化財調査報告書第9集
- 美津島町教育委員会 2003『金田城跡II』美津島町文化財調査報告書第10集
- 行橋市教育委員会 1998『史跡 御所ヶ谷神龍石』行橋市文化財調査報告書第26集
- 福岡県教育委員会 2010『特別史跡 大野城跡整備事業V』福岡県文化財調査報告第25集 - 下巻 -
- 熊本県教育委員会 2012『鞠智城跡II - 鞠智城跡第8～32次調査報告 - a』熊本県文化財調査報告第276集

写真図版



南部谷部から堀切門跡・堀切集落を見る



堀切門跡 32 トレンチ（南から）



堀切門跡及び周辺土壘を見る



堀切門跡高台（北西から）



堀切門跡高台 24 トレンチ耕作溝検出状況（南西から）



堀切門跡高台 28, 31 トレンチ（西から）



堀切門跡高台 27 トレンチ（西から）



堀切門跡高台 27 トレンチ（西から）



堀切門跡高台 31 トレンチ土層断面（北西から）



堀切門跡高台 31 トレンチ（北西から）



高台東側斜面土層堆積状況（南から）



高台東側斜面土層堆積状況（東から）



堀切門跡 16~20 トレンチの全景（西から）



堀切門跡柱穴棲出状況（西から）



堀切門跡 16 トレンチ柱穴検出状況（南から）



堀切門跡 16 トレンチ南西壁土層断面（北から）



32 トレンチ（東側斜面裾部）全景（東から）



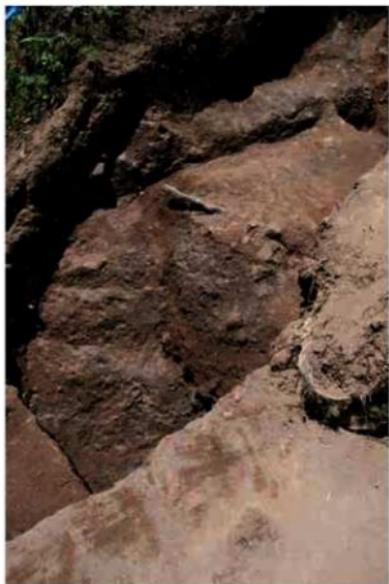
32 トレンチ（東側斜面裾部）全景（東から）



32 トレンチ裾部土層堆積状況（東から）



32 トレンチ西壁土層堆積状況（北東から）



32 トレンチ裾部積土状況及び地山検出状況（東から）



32 トレンチ土層断面（南東から）



32 トレンチ北西壁土層断面（南東から）



32 トレンチ南西壁土層断面（東から）



32 トレンチ北東壁土層断面（南から）



32 トレンチ裾部北東壁土層断面（南西から）

32 トレンチ北西壁土層断面（南南東から）



堀切門跡 22 トレンチ（北東から）



堀切門跡 15 トレンチ（南から）



堀切門跡 4C トレンチ（北西から）



堀切門跡 4C トレンチ積土状況（南東から）



堀切門跡 第33・34次調査出土遺物

報告書抄録

ふりがな	きくちじょうあと							
書名	鞠智城跡							
副書名	第33・34次調査報告							
卷次								
シリーズ名	熊本県立装飾古墳館分館歴史公園鞠智城温故創生館							
シリーズ番号								
編著者名	村崎 孝宏、岡本 真也、亀田 学							
編集機関	熊本県教育委員会							
所在地	〒862-8570 熊本県水前寺6丁目18番1号 TEL.096-333-2706 FAX096-384-7220							
発行年月日	2020年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
立石遺跡 群	熊本県菊池市木野 字堀切	市町村	遺跡番号	33° 00' 06"	130° 47' 18"	201801127 ～ 202002	約180 m ²	史跡整備
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
鞠智城跡	山城	古代	柱穴、城壁積土	土師器、須恵器、陶磁器、鉄斧				
要約	<p>鞠智城跡の南側の堀切門跡周辺の調査を実施した。西側高台部分は、削平されており、土塁や橋等は検出できなかった。城門部分についても柱穴や登城道に伴う硬化面を再確認した。</p> <p>城壁下部には、互層積土を確認した。下部には黄色の粘土が多く使用され、基礎盛土の可能性がある部分を確認した。</p> <p>中段では柱穴を確認し堰板を留める柱等と推定できるものと考えられる。</p>							

鞠智城跡

—第33・34次調査報告—

令和2年3月31日

編集 熊本県立裝飾古墳館分館

発行 歴史公園鞠智城温故創生館

〒 861-0425 熊本県山鹿市菊鹿町米原 443-1

印刷 株式会社 啓文社

〒 861-3102 熊本県上益城郡嘉島町下六嘉 1765

この電子書籍は、鞠智城跡 第33・34次調査報告を底本として作成しました。
閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用
してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書
館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法
は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：鞠智城跡 第33・34次調査報告

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦2022年6月15日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは
熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL：<http://www.kumamoto-bunho.jp/>